

# 神靈矢口渡

作者 平賀源内  
吉田冠泉堂一

楚辭よ曰身既いはくのみまで死して神しん以もて靈れいなり、子こが魂魄こんぱく鬼きの雄ゆうとなる、されば國事こくじ  
よ死しする者もの精神せいじん強壯きょうじょう武毅ぶぎ長ながく、百鬼ひゃくきの雄傑ゆうけつたるとかや、遠とほく古いそを考かんがへ  
異國いにの伯はく有ゆう我朝わがとうの、管家かんけの例目ためじょのあたり、武藏むさし國くに荏原えひらの郡ぐん矢口やちの村むらよ鎮ち  
座ざまします、新田しんでん大明神だいめいじんの御神德ごしんとく靈驗れいげん有あ共中ともよ申まことも恐おそれ大君おほきみの御代ごだい  
傳つたはりて九十九代後光嚴院ごこうげんいんの玄くろろし召めし天あめよ二ふたつの日の本もとや南北朝ほんぽうしやうと引  
分わけれ都みやこの花はなの歸かり咲さき吉野よしのの内裏ないりよまします、後醍醐帝ごだいご第七しちの王子おうじ後  
村むら上の皇みやこの皇居ごうきょも月つき移うつり、爰こゝも雲井くもいの御所ごしょ作つくり經築けいそく殘のこる方ほうもなし、附つき  
添そなへ給たまふ公卿こうけいよ、四條しじょう大納言だいのうげん隆資りゅうし卿けい坊門宰ぼうもんさい相清忠あいせう卿けい、其外ほか公卿こうけい天上人じやうじん禮れい

義正しく参列有比ハ延文四ツの年菊月半召ム依て参内と披露して新田左兵衛佐義興、智仁勇備の御貌御階の本よ平伏す、隆資卿笏取直シカニ義興汝を召事餘の義あらず父義貞北國よ亡ビ楠父子討死してより無勢の南朝を見侮リ尊氏押て將軍よ任し、悴義詮を都よ差置、其身ハ鎌倉よ引籠り、四海を并呑せんず勢捨置バ御大事、汝を討手よ遣すべしとは成清忠の奏聞、此事勅問有ん爲といどこまやかなる詔、義興はつと袖かき合せ、同じ清和の流よて、一門ながら朝敵の首領といひ、父の仇よて之へば尊氏を亡さんと晝夜軍慮を廻セ共、彼が勢四海を覆ひ味方小勢の此時節軍を出ししんへん謀なきよ似たり、義興退て考る、又彼が執權畠山入道誓高師直師安にも劣ざる奸曲我儘已よ親しき輩よハ功なきよ所領をあたへ、疎き者ハ忠臣をも退る、是を惡む者多けれバ足利家内乱を生ぜん事遠かるべからず、其時節を考て補正儀と心を合せ、京鎌倉

を亡さん、義興か方すみひ天の時至らざるゝ只今義興討て出なひば  
勢少き皇居の守護、心元なくひと勅答有べ、坊門清忠ヤア迂遠き義興が軍  
慮足利家の内乱を待て、謀をなさんなどし相手の誤を待ん、逆端の歩  
兵をつく下手象棋差當つたる理よ叶はず先ずる時の人に制し、後るも  
時の制せらるゝの本文片時も早く討て出、尊氏を亡せよ、と横紙破りの  
一言を聞流して義興公ハア詩歌管絃シカカラハゲンへ天上のモモチモモ遊び軍の事へ武門の職  
百戦百勝も善の善たる物ならず、謀を帷幕の内よ廻らし、勝事を千里の  
外よ決するゝ身不肖なれ共義興が軍慮の奥儀、當時守護の武士少き皇  
居を捨て軍を出さべ、義詮が京都の軍勢、襲奉らんの必定其本乱るゝに  
大事此義は是非よ無用と、いわせも立す坊門清忠ヤア過言の義興官軍  
少きよ似たれ共、共和田楠を始として、皇居の守人いくらも有汝一人居ら  
ぬ、池沼味方事欠へきか、聞へたゞく、軍慮よかて付尻込するゝ軍が強

いか恐しいか、比興未練の億病者、繪言ハ汗のごとし、違背すれば違勅の科討手又行か、但へいやかなんとくとせつかけく、己が工を押隱し勅定ごかしのきめ壓狀、義興公胸又すへかね、軍慮の妨天下の仇引ふろして只一討と立寄しが待亥ばし、禁裡の騒君への恐れ、去ながら時節至らぬ今度の討手拙き負をなすあらべ先祖の名ふれ家の恥、父義貞伯父義助、楠親子が跡を追潔く討死し、末代又名を穢さじと思ひ定て御前よ向ひ、勅定の趣畏り奉る、夫又ついて一つの願ひ、先祖頼光を傳そし、水破兵破の二ツの矢代々源家の重寶たる故父義貞所持せし所討死の其後北國より差上しを、大内又止め給ふよし何卒下し給へる様、奏聞願ひ奉ると思ひ込て願ふほど、清忠卿せしら笑ひ、鹿忽ニ義興忝くも二筋の矢、養由が娘椒花女より、汝が先祖頼光へ、夢中又授し奇代の重寶、代々源氏の棟梁たる者是を所持す、汝が父義貞の左中將又任し、惣軍の大將

たる故、夫を所持しても苦しめられず汝おの漸く左兵衛佐さやにて昇殿しょうでんも叶かなず、あくちも切ぬぶんざいで矢を望んとハ不敵ふてきく及およぬ願ひとやり込られ、こたへよこたゆる義興公、無念の捲血まきじりをそゝぎ思ひ詰たる其有様、戦慮せんりょ何とか思しけん、隆資卿さかよしを近く召れ、玄くわかくの勅定てつてい有あべ、ト答とうへて隆資卿玉座ぎょくざ又また鋤とがし二つの矢恭うやまく敷携のべうけいへて階はし近くおり立給ひ切なる汝おのが望ませ任ませ、二にツの矢を下さし給なまへる、有難く頂戴てうだいせよと渡し給なまへば義興公ぎこうはつと飛と玄くわさり家の面目めんぱく身の冥めい加此上うえやほべきと歡給うきへば、清忠きよただの不肖ふしょの無性面むせいめん君くわんハ二人が胸の内うち固知ごしせ給なまねば、早く朝敵討亡あそして、震襟休しんきんめ奉れど、御籠ごのはつとおりけれハ諸卿各退出しゆつ有義興公ぎこう討死とうしと思ひ定たどし覺悟かくご是そぞ内裏だいりの見納みのうめと名殘惜なまごせきげよ見返りみかみ猛たけき心こころも打たたはれ玄くわづく御門ごもん又またしかる、思おもひも寄よぬ落おちし穴あな踏ふみ込こ給なまふ頭かしらの上うへ丈だけ等ひとしき大石おおいしの、どうと落おちるを身みをかため、兩手ふたてよ玄くわつかど、

請留エイヤウンて飛上ヒコり心得ぬ此有様此穴へ踏込ハシコべとたんの拍子ハラタシと此石  
の上より落ハシマる仕掛シカツの工ハサウエ扱ハサフ此義興をなき者よせん爲ハシマえ僕人共の計ハシマひ  
よな、アおこがましや片腹カタハラいたや、譬ハナヘいかなる磐石ハシマガヤたり共義興が爲ハシマえの塊  
同前去ハシマあがらかハシマる非常ヒジカラの此石を、内裏ハシマ置ハシマんも穢ハシマらハシマしと、兩手を立  
つと差ハシマのへて築地ハシマの外へ授給ハシマふ表ハシマよ扣ハシマへし伏勢ハシマの天窓ハシマの上へ落ハシマかし  
れべ、何かハシマ以ハシマてたまるへき壓ハシマよ打ハシマれて十余人微塵ハシマよ成ハシマて、死ハシマてけり、殘  
りし者共身の毛立ハシマ天狗ハシマの所爲か魔ハシマの業ハシマか、こゝやくと一同ハシマ跡ハシマをも  
見すして逃歸ハシマる凡人ならぬ勇猛力末世ハシマよ、新田大明神と拜ハシマれ給ハシマふも行  
末ハシマ誰はだふれん紅の花案ハシマじ過ハシマしを枕ハシマよ語ハシマれ諷ハシマふ一ふし媚ハシマける爰ハシマ  
都の色里ハシマへ誰も尋ハシマて九條ハシマの町井筒ハシマが内の居續ハシマ新田小太郎義峯ハシマ公遊  
び勞ハシマれし居眠ハシマりよ、太夫の膝ハシマを托ハシマ手の興ハシマを催ハシマほす牽頭ハシマの小吉ハシマ五作  
我小歌ハシマお目が覺ハシマぬ昨日の意趣ハシマよ一番參ハシマろか、望ハシマならやつかけふ。

まふ玉殿、三絃頼むと返事又中居か三絃、玄かつべらしく差向ひ、問ま  
玄よく、何でも問玄やれ、問ま玄よく、問玄やれく。小袖ハ羽二重刀  
ハ正宗坊主ハ、鉢才、お醫者ハ、寸伯、女ハおもん。男ハお安ヤ待く。今ハ  
男又お安とハ、サア一盃呑さみや置ぬと、寄てかゝつてつざかくれバ。  
余り騒な姦しいと云ひれて二人が、旦那のふ目が覺た。太夫様お目  
覺しよ此大盃で、旦那へ一つ上なされ、五作子、主様ハ風引なさつて、頭  
痛がするとおつ玄やつてじやばく其頭痛の故事來歴彼慈姑めが、おれ  
おれお前が毒玄やといふた格で、風呂ハ太夫様うち小吉、三人又成て二  
人が淋しがるといふ、付合の發句の通人交すのちんくこつてり、や旦  
那内又斗りござらず共太夫様を連まして東山か高尾の紅葉をみぢおれ  
ハ余り長逗留、今朝も兄貴義興殿から、大急用をいふて来れど、まだふら  
付て歸らねば、堅い顔で呵つて居やらふ。ふとゑいわいなせめて、二三日、

「太夫様のが尤淋しく成と歸らふとおつ迄やる。わつさりと酒よ  
玄よふ、中居衆銚子と立騒げば追々出る中居共、さつきよいふてやりな  
はつた江戸兵衛様が來なはつた、追付爰へ見へるぞー、都でゝ藝子と  
名付東てゝ、踊らぬ時も踊り子のすんとして又譁しきゝ夫者と町の藍  
こひ茶物好玄たる袖褶も引べ轉ばん其風情義峯公の玄ろくと不思  
儀そふゝ顔打眺め、おりや江戸兵衛といふた故、男藝者かと思つて居た  
りや、美しい踊子だ、あの子の此中江戸から登なはつて、そふすべい  
かふすべいと、まだ詞が直らぬさかいで有名の呼いで、江戸兵衛様と仇  
名斗り呼わいナ、今夫で聞へた、ヤ旦那、同し兵衛でも少の事で、助兵衛で  
なふて仕合でござります、ティきついおてうしもわつちや此間登いして、  
まだ勝手を玄らないから江戸詞を云やすよ余り笑つてくれなさる  
な、アイヤおれも上野の新田で育つた故京の詞のなまけて悪い、ならふなら

太夫あとも江戸の詞みてほしい。お前の折とそふ云んすばかりで、  
わたしも此間藝子様と江戸詞を習。やん玄た稽古みて見やん玄よ  
ふと江戸兵衛が胸ぐら取て、コシナぬ玄や誂りんせんよ、わつちが方を打や  
つて此中も丁子屋のみな鶴龜の所へいかんしたを子供が見付んした  
れ、見なんじアまじめな顔わい、本とあつかましい余り馬鹿ら玄う有い  
すよよ、恥かしと袖覆へ、太夫様出来ましたとふもいへぬと  
そしり立一度とどつと打笑ふ、小吉も五作も閉口か、閉口の段じやび  
さりませぬ、閉口次手と此所で、江戸役者の聲色をやりかけ山、江戸兵衛  
を彈いて下んせ、是もお江戸と隠なき市川の團十郎でやすしよ、市川の、三  
升でせいで、いきもせぬ聲色置み玄ろ、南無三寶又付た折角つかい掛  
た所を止められ、癪病よならねばよいがと、天窓をかけ、中居のお玉江戸  
兵衛、お前此中云なはつたきやんとやら、わんとやら、喰付様な喧嘩の

身ぶりが見たいわいな、又身かへ久しいもんだよ、わつちや恥しいよ。  
そんあ事たすつと流しは、ヨリよからふ所望くと口よ、<sup>のぞ</sup>望めバ立て身  
持へ、子供衆其幟巾てのひ取てくれなどいふ間よ五作が様側の布簾はづして  
當座の肩衣のき東西く此所で京と江戸との喧嘩の身を致し分ます、<sup>お</sup>神  
妙よに一覽下さりま志よふ、其爲の小斷左様よ烟管で枕をかちくく  
上方の出入り頭巾をかふかぶつて、草履下駄よてかふいふ身ぶり、お  
つな胴聲ぼのきゑを出してコレく若の、ちよど橋誂迄出て貰ひや志よ、ちよど下よ  
居て下あれど、此様なまだるい事で日の短い時の間よや合ぬよ、江戸  
の喧嘩の幟巾をかふ打懸て、かふ肩かたを力ませて、何のこんだはつしけめ、  
人を茶ぢみ志むあがつたうぬが様な癡心漢ばらばらの鼻はの穴へ花緒はなじをすげて、何で  
も安賣十九文日和下駄ひよげたよしてくれべい、いまくしい置上おきあれ、こんな  
物だと打笑へば、皆一同よ打こけて興おきを催す斗なり、騒の内よ中居なかゐがさ

いぱい、とかふする内夜が更た、お休といふ鹽しおよ然ぜんに旦那又明日、太夫様江戸兵衛泡は、皆太儀だ歸つて休め、そんならもふいなんすかへアイわ  
つちもお暇ひまふ玉殿や三絃箱頼ますよよテ、皆様よふお出たさはへテ小吉様の又ざやうだん、惡事あくじなシるなシるあハ妙義めうぎの隣となりありシなりの宮へ參さんふか、いふかかふかの物もの案あんじ、あんし宜よし頼らやすとどよめき連つれて立歸たちかれ、義峯公ぎほうも一間の内涅槃ねいはんの床ゆ入給いりけいふ、一間の内うちぶつこかハ面おもてふくらせし坊主ぼうず、といつもこいつも初會はじゆだと思つて、余りむごく玄上くわんる、來くわるかくくと賣うぬ根附ねづを見る様よう、蒲團ふとんの上うよ待まぼうけ、いまくしいと云いつく傍見廻わたりまわし、相圖あひの玄こゑいふき二つ三つ、跡あとを出だる竹澤監たけざわ物秀ひで時、江田判官景連有合うごふ縛なづきを携たへ出だ先まへと招むかすれ、おめす憶おもせず縛なづの上うどつかと居りし大入道尊氏公そんじの執權職せんしよ嵐山入道道誓だうせいとい云いねど顔あらわ顯あらわれたり兩人ふたひとの近く指寄さへ、家内いえもふせり、倡妓ちうぎ共ともも寐ねさせ

置間を隔たる此座敷、とくとお談じ申上ん、兼てより此入道天下と望  
有故よ防門清忠と心を合せ、新田足利威を争ひ、合戦よ及ぶ様と糸を引  
せ、楠親子義貞なども謀の、圖をはづさせ、償らせて討死させ尊氏一人  
よ成たれべ、折を見合せ刺殺し清忠を王位と即此入道將軍職お手前二  
人を兩執權と思へ共、南朝と有新田義興親よも勝る大こゝもの、さやつ  
が此世よ有内の中よ大望思ひもよらず、彼楠を湊川へ無理よ追やつた  
其格で、尊氏追討の勅定とがしかし、玄れさせて討死さすか、それ迄もなく討  
取かどさまゝの計略と、そこを存て此判官、清忠殿と志めし合せ、南朝  
へ忍び込みやつが内裏を出る時、門の上よ大石を上置、下よ落し穴を  
仕掛け上から落る様よ、工夫を以て拵置しよ、サアくお聞なされ、兼て義  
興大力よて二十五人力有との偽故、三十人よて持兼る大石を、あたまの  
上から落し懸しよ、宙よて請留剩手鞠か小石を投る様よ、築地の外へ投

出し、此判官が伏勢十三人迄討殺され、近年の大志くじりやくそんな事で、参るまい。此監物か思ひ付みの弟の義峯め、此廓へ入込しこを幸きやつから取入一思案しあん、其事に此入道も汕斷なく二人の家來を牽頭けんとうと仕立て付置たり、ア此監物の義峯が相方臺らわと女郎をたらし込んだ色の贈物様さりげと拵てもこいつも賢き女よて義峯は心中立、むざと大事も明されず、旁以て難義至極、其上水破兵破の矢や、武運の守りと成故よ尊氏公もほ懇望こんぼう、これも義興か手て入べ、とかくこつちか皆すかたん、アどふがなど三人か慾惡よくおぶ道の思案取と、横手を打て竹澤監物有ござく上分別某の親入道しんじゆと新田方の幕下ばくかよ屬しよし、方ほうよて手柄てへいも有ござしが、義貞討死の其後の入道殿の世話よて尊氏公へ宮夫みやうふからの思ひ付ふ、然しかりとくと一間いんよて、示合さんいざこなたへと三人の打連奥へ入いよける思ひくの夢結ぶ座敷くわいも子の刻過、一間いんを出る義峯公ぎほう臺其竹澤監物

とやらへどふしてそなたを其様サイナ死だ娘と私が顔が生寫し娘じや  
と思ふ逆紋日其外氣を付て様おがりの贈物、とくよもお前へいふ筈なれど、  
尊氏方の人なればどんあ方便も計られずと今迄お耳へ入ませなんだ。  
今時の人心むざと氣きい敵されずと咄おひしの半一間の内はつたはた付  
物音人音先よこちへと義峯公障子の蔭かげ立忍しのぶ透間もなく入道道贊、  
懷劍持し竹澤が腕捻上怒の大聲おおこゑ我をたらして遊所へ引出し、寐首かくし  
づ謀ぼう、憎い奴と捨伏れば竹澤無念の歯がみをなし己が首を土産みやげみし  
て昔のよしみ新田方へ奉公と思し又其方便の顯れしハモ残念やと起  
返るを刃物もぎ取入道か様おはんはどうと踏落し判官心得たりと刀の背打  
骨ほねも碎くだけとぶち居すわる竹澤息おきもたへドヌ手足しゆそくをもがき七轉八倒入道聲しちてんぱうとう  
懸おはよいく一思ひよ殺さんより世上の見ごらし逆磔おがくばりつけ其松そのまつよくし付  
夜明ての上成敗せんぱいせんニモ左様さやうと判官がぐつとゑめ上猿あさぎつあき、夜明よあけぬ内うち

いざお歸り、泥坊めに此通縛つて置バ氣遣なし仕置ハ家來よ云付んデ歸ら  
ふと、兩人ハ玄たり顔よて出て行始終忍んで立聞臺、手燭携走出庭よ飛  
おり漸ど禁解て耳々口竹澤様監物様と呼生る息吹返し、臺殿か忝い  
我も昔のよしみ有ば、新田方へ奉公せんと、兼てこなたへ頼め共、一旦尊  
氏へ隨ひし某故、疑も尤、一ツの功を立ん廻仕損せし殘念や、とはらく  
くくとこぼるし、涙臺も俱よ貰ひ泣<sup>御</sup>、御無念ハ御尤、私を娘も同前よ  
思召て下さります、お心を疑ひてかふいふ時宜ハ私か科くらへてやい  
のと取組れば、泣て居る所でない義岑公お入の事ハ兩人がけどつ  
たれべ討手の來んも計がたし、早々落し参らせよと詞も終らぬ其所へ、  
どつとに入捕手の大勢<sup>開</sup>、義岑此家々居るをはかり知入道殿の下知  
を請荒濱軍次向ふたり恥を思ひ、腹を切と呼はりく、亂入、臺を忍べ  
せ、竹澤監物、物をも云すなき立れば、叶<sup>ヨリ</sup>かぬと大勢か表をひして逃て行。

いつの間よかれはいりけん障子の内うち荒濱軍次臺を小脇わきよかい込んで、  
飛で出るを竹澤監物首筋摑つまんで引戻し、拔身もぎ取軍次が首討落して  
つゝ立り、障子開いて義岑公ヨシマツコ、監物疑うそがひ晴た當座の褒美ほびと投出す二腰  
ア有難きに惠めぐみ昔むかしよ替かはらずに奉公、又も討手の来るに必定、君より早くに  
歸り奉公初路ろじゆ次に供そなへそんならお歸りなさんすかへ、隨分お怪我のあ  
い様よう頗ややまするに臺が名残なごり、我われ裏うらより密ひそかよ出だん、監物の表ひょうを委細まいさいに承うけ  
知仕しる、アラウト表ひょうをさして「走はり行は、千早振神の惠めぐみの岩清水きねが鼓つづみも聲こゑす  
めり、新田左兵衛佐さへざ義興公、今日出陣の龍頭鍔形たつがしらはがた打たる五枚兜緋威かぶとひねいのに  
着長威きせきが有て猛たけきに骨柄こうがら同舍弟しやてい小太郎義岑色香争いろかあらそふ若武者の花の姿や  
小櫻さくらおどしひ供そなへよ竹澤監物秀時ひでとき、其外家の子士卒迄万燈まんとうの火ひよ映あた  
る鎧よろいの金物武ぶの光り實じつもゆくしく見へよける、義興仰出あがむさるより、イヌニ旁此  
度朝敵足利尊氏討亡ぼうぼうせとの勅定ちつけいなれ共必定今度の一戰かたはかゞか數

勝利の有まじ鬪の外の武將の下知、軍の事の臣より任せ時節の来るを待  
給へど色々諒ナセ共親義貞より劣し器量比興至極と清忠が惡口達て  
諫バ憶するよ似たり先祖の名迄穢さん無念さ天運未至らず共正八幡  
のほ利生源氏を守りましませと此宮居よあのごとく神慮を仰ぐ万燈  
の神の惠を頭より戴き一戦よ討亡し震襟やすんじ奉らん爲イヤ監物汝の  
新參ながら武藏の國の産と聞歟地の案内よつく知ん此度の先陣ハ汝  
たるべし猶も忠勤勵むべしと仰よ監物頭を下ス有難きは詞新參の某  
大役仰付らるゝ段武士の面目身の本望君の武勇よ聞かぢして脚腰立ぬ  
足利勢味方ハ一致の逸武者只一樣よ踏破る味方の勝利疑ひなし片時  
も早くほ出陣と万卒一度よ悦びの聲よ勇のほ大將イテ神前へほ暇賽も  
うしの柏掌の音かあらぬか砂煙ばつと吹來る風よ連一度よ消る燈籠  
の皆どこやみの神の告綱よ殘る一燈の光りの薄き武運かと胸よ當り

し義興公所詮勝利のなき身ぞと、極し上よ極る覺悟、心よ徹して小太郎  
も、あら心得ぬ此不思議尤火を烈敷あすも風消るも風どへ云あがら、燈  
し立たる万燈の一時よ消し今度の一戦敗軍との告成か、身の上も  
覺束なし、とくと堅慮を廻らされ然るべしとの給へば、竹澤進んで、義  
峯公の仰共存せず、神力勇者よ勝事あたはず、何の是式よ神の告、今南朝  
北朝と引分れ、威勢よはびこる尊氏が峙たる万燈を、眞此ごとく打消し  
て、南朝一統の世よなさんとの知せの一燈、目出度奇瑞よしと底工有秀  
時が、詞を鏤つてやける、義興莞爾と打笑給ひ、よくも祝ひし監物、義興  
思ふ子細有い、義峯ハ只一人密々都へ立歸り禁庭の守護怠るなど、仰よ  
義峯大よ驚、兄上の詞共覺ず、一旦は供下し某目前怪敷神のは告彌以  
て心得ず、片時も傍を離る事ハ思ひもよらず、生るも死るも兄弟一所、  
但用よ立ぬ腰抜と思召ての事かと、云せも果す、左よあらず、命を捨

るゝ君の爲子孫を残すゝ家の爲、先祖源の頼光を傳りし水破兵破の二筋の矢、歟足利尊氏も同じ清和の流なれば、兼て望と聞及ぶ、參内の折からも、清忠が支しかど、君恩の有難さ、某々下し給へりし、弓矢の冥加家の譽、戰場又持ならば、若運盡て兄弟一所、討死せんも斗られず、左有時一家の重寶、敵方へ渡さん、先祖へ不孝、武名の疵、又心得ぬ、坊門清忠、必定朝敵一味の族、我々都を出るならば、其虛み乘ん、彼等が工我々替つて君を守護し、必忠勤怠るな、天の命數限り有若も運命盡果て身の戰場よさらす、共名の末代、暉さん汝の都へ立歸り時節を待て消殘る火影のことく、源の氏の光を暉やかせ、南朝世の忠臣と末代の武名を上よ、此詞を用ひずべ未來永々勘當ぞと、必死と定し武士の口より言で、心より是今生の別れぞと、さしもゆゑ敷は大將、恩愛離別の、目の内も満る涙の伏勢を防智謀のなかりけり、義峰も勘當との重き詞と詮方も、涙を押へ

て、<sup>アカシヨ</sup>畏り奉る、勝負の時の運なれば、<sup>ナニヘバ</sup>譬<sup>ハシメ</sup>敗<sup>ハシメ</sup>軍有<sup>リ</sup>也、必短慮<sup>ム</sup>思<sup>サ</sup>す共、目出度<sup>ケル</sup>凱陣待<sup>マス</sup>する、聞入<sup>有</sup>て満足<sup>シ</sup>、今汝<sup>ム</sup>わたへ置<sup>ク</sup>二筋<sup>ノ</sup>の矢を心のかため、二張<sup>ノ</sup>の弓<sup>ノ</sup>の名<sup>ヲ</sup>取<sup>ナ</sup>、<sup>アカシヨ</sup>めん<sup>シ</sup>、篠塚八郎重虎<sup>ハシヅカヒロタケ</sup>の軍勢催促<sup>ス</sup>遣<sup>ハシメ</sup>し、此所<sup>ヨ</sup>有<sup>ニ</sup>共<sup>ス</sup>斯<sup>ミ</sup>下知<sup>ヲ</sup>傳<sup>ヘ</sup>たれば、追<sup>シ</sup>跡<sup>ヨリ</sup>かけ付<sup>ク</sup>、<sup>サ</sup>出陣と、仰<sup>の</sup>内引<sup>出</sup>すお召<sup>ノ</sup>白栗毛<sup>ハリケ</sup>、ゆらりとめせば、義峰<sup>ハ</sup>見上見おろす血筋<sup>ノ</sup>別れ、武士<sup>ノ</sup>盛<sup>ヲ</sup>吹<sup>チラ</sup>す無常<sup>ハシモト</sup>の嵐櫻井<sup>ハシモト</sup>の親子<sup>ノ</sup>思<sup>ひ</sup>、楠が名<sup>ハ</sup>盤石<sup>ハシモト</sup>と堅<sup>タ</sup>だる、義心<sup>ム</sup>劣<sup>ヌ</sup>義興公<sup>ハシモト</sup>障泥立<sup>タ</sup>たる、鎧<sup>アキ</sup>の鳩胸隼<sup>ハシモト</sup>の翅<sup>ヲ</sup>と驕<sup>ハシモト</sup>る駿足<sup>ノ</sup>の跡<sup>ヲ</sup>、隨<sup>ム</sup>諸軍勢<sup>ヲ</sup>飛<sup>ガ</sup>ごとくかけり行<sup>ハシメ</sup>跡<sup>ヲ</sup>、義峯<sup>ハシモト</sup>玄みト<sup>ト</sup>と肝<sup>ハシモト</sup>よこたゆる同胞<sup>ノ</sup>の別れ<sup>ヲ</sup>、心<sup>ハシモト</sup>ほくと影見ゆる迄伸<sup>ハシメ</sup>上り、見送る影も簾<sup>ハシモト</sup>の手<sup>ノ</sup>次第<sup>ハシメ</sup>、<sup>シテ</sup>遠ざかれば涙<sup>ハシモト</sup>をふくんで立たる折<sup>ハシモト</sup>から、思<sup>ひ</sup>がけなき宮居<sup>ノ</sup>陰<sup>ハシモト</sup>、<sup>シテ</sup>上たる時の聲<sup>ハシメ</sup>、何者<sup>ノ</sup>の寄<sup>ス</sup>するぞと傍<sup>ハシモト</sup>を睨<sup>ハシモト</sup>で立たる所<sup>ム</sup>、<sup>ヤア</sup>新田小太郎義峯<sup>ハシモト</sup>、見參<sup>ト</sup>聲<sup>ハシメ</sup>かけて蹄<sup>ハシモト</sup>を飛<sup>ス</sup>、駒<sup>ハシモト</sup>下<sup>ハシモト</sup>駄<sup>ハシモト</sup>やゆり

上裙の八文字どんなふ敵も弓張の目元の月や花の顔、戀の臺が寄かけ  
ていきとはでどの討手の大將、跡からどやく、禿末社かぶらまつしやそなたの臺タケ  
とふざやと力身じ腕も拍子抜敵ひやくしぬか敵でも憎からず、臺タケ傍見廻して、  
あの拘りの顔わいま、いつぞや廓くろわの別れの時、兄おに様とほ一所ひと、武藏と  
やらへ軍仕ぐんしきみ、いかねばならぬとおつぞやつた、聞と持病さびやうの此瘡つかはとふぞ  
いかすと濟よふと神かみ様へ立願たてがんやらばだし参りのかいもあふ、けふけふ出  
陣ぢんなさるさるしと、聞て身も世もあられぬ故、お顔が見たさ逢たさみ、あの衆  
頼んで遠とほい道みち來事きむ來ても大勢おほの、侍様方兄おに様の前といひ、物いふ事  
もならぬ品、どふかかふかと思ふ内、結ぶの神の義興様、都つゝお前を殘す  
との粹すいの上うもりも、嬉うれしき、何なんやいい濟すくぬ顔して、人の思ふ様よもない憎  
い男おとこと鎧よろいごしご、いたづめつても擲なげいても、こつちの手てが痛いたむ斗コレイ、  
そんな機嫌きげんざやないわいの、どふ思ひ廻しても、一所ひと行ゆねば兄おに上のの、

身の上も覺束おほつかなし。すく旦那お前をやつて、太夫様おとしやうより此五作がきつ  
い難義むずか、夫およ、太夫様もよくく思召おもなまわべこそ、傾城けいじゆうの、畫寐ゑまぬ程ほど思ひ  
詰づ、とふぞ今一度お顔が見たいと、屋敷方やしきがたの女中方じょちうがたが、芝居行しばゐあか何ぞの様よう、  
夜の九つからどつさくざ道みちり飛とやらかけるやら、外八文字ほかはじめも一文字ひとじめ、所ところもや  
んだお前の出陣しゆぢん、悦えび事ことの我等われらが越こ向むかか、敵のの旦那おとしなを討うて、あめる寄手よての  
大將太夫様だいじょうおとしやう、四方よのを取と卷ま此館手このて亂らん調ひら、打太鼓持たたか廣ひろげる指指の亂杭逆茂木  
酒肴さけう兵へ糧りょうのの此提重幸しきじゆこうの幕まくの内うち、跡賑あとあいしよ呑のかけふ堅かたい姿すがたのお床のゆ  
入い門もん出での笑わらひ本もと、作り物乾物かんぶつものとい違たがふ、生なまの物ものを生なまでお目めみか  
けるさあく。お出でと無理むりやりよ、遼ひよ弱よる色いろの道みち、女のよれる神かみがきよ是非  
なく引ひれ入い給たまふ、跡あとは二人ふたりいたり顔おほ兼まて望のぞの彼かれ一物いつもの、引ひたくつて主人  
へ渡わたべ裏わら美うつくしつたり、色男いろおでも遼ひの義峯ぎほう、あら立てあらたて事ことの破はれと、幕まく  
覗のぞいてうまいぞト、例たとの大酒おほしゅのどろつべきべき、勧すすめられよ奪取だつしゆん汝な傍そば

又眼を配れ、合点首尾よくせよと、小吉の幕へ跡より五作、四方より氣配  
忍ひ足なんなく矢盜取、小吉が小聲より上首尾く、是さへ取べ義峰を、ぶ  
ち殺すゝ手間入ず、片時も早く主人へ手渡し、サアこいと逸足出してかけ  
り行、俄々騒ぐ幕の内、かけ出る義峯も、取付縋る臺も俱も、引摺れても放  
さばこそコレヤ殿様、吃相かへてヨリヤ何事、なんぞ夢でもほらふしたかヨレ氣  
を鎮めて下さんせ、ヤア何事どり、兄義興を預りし大切の二筋の矢、思ひも  
寄ぬ紛失、兼て尊氏懇望と聞、敵方へ奪れての味方の不吉我落度、兄上へ  
のヤ譯ど、差添抜手も取付臺、イヤイ放せ、ア待て下さんせ、ナ道理玄やく  
くがミシヤ、今お果あされて、誰が残つては矢の誉義、兄に様へ此様子、  
ヤ上る人もない、もふかふ成た上から、再び廓へ歸らぬ胸、身を碎ても  
誉義して、其上で叶はずば、わたしも一所より冥途のふ供死る命へ惜から  
ねど、此に難義も皆私故、コレ堪忍して暫くの、お命あがらへ野の末山の奥

迄も夫よ妻よと呼れ、一所よ居たらわざや本望、思案して下さんせど、女心のくどくと跡や先立涙え尤もよく云た、此所で相果なば、盜賊の僉義もならず、大死と成骸の恥辱、一先此場を立退て、草を分つては矢の行衛定めなき身の俄旅にわかたび小摺引上帶引しめ身持する間もなく、引返して二人の牽頭跡よ付添數多の家來シレ討殺せと追取卷ヤフ合点の行ぬ一人の奴原ばら、折ほりは矢を奪取しも、僻等二人よ極きわつた、何國の誰よ頼れし、サア眞直よ白状せよ、ちよこざいな詮義だて、引くもつて主人へ土産みやげアレ打居よと聲よ連捕どうたとかしるを身をかれし、投すへ蹴けすへ踏飛ふみし、手をつくして働はたらけぞ敵のぞ大勢身ハ一つ見るよ、臺が案じ助てだてん方便わざわらがも女業群わざわらがる大勢義峰の、手取足取打倒し、既すで又危き折こそ有、篠塚八郎重虎重虎の主君のふ供の後あせ、かくと見るよ飛とり、家來を投退踏ふみちらし、様子聞間も足弱連、此場を一先落させ給へ早ふくと見送つて、宮居の前よ鳥居立、

遁さぬやらぬと家來共、兩足兩腕數十人、押とゑやくれど動ばこそみこ  
くほやく打笑ひふがうつ虫めらかほでてんがう、新田の山内よ隠  
なき四天王と呼れたる篠塚伊賀守が嫡子八郎重虎、此兩足のはへ抜の、  
大佛柱を駆鼠動ぬ事いかぬ事、助た逆殺した逆高の知たる下膳共、早く  
此場をなくなれく、ナ下膳とい推參く、畠山入道の郎等石原丹治逸見  
傳吾、姿をやつし義峯を討取方便の牽頭一ぱい喰せて奪たる矢、主人へ  
渡せば新田の滅亡廣言吐前髪首さらへ落せと切込刀柄拳を一握り、そ  
ふぬかせばモウ助ぬに矢の盜賊觀念と、一振ふつて打付られシ遁すなど  
下知の下、どつと馳寄雜人原引つかんでハ人磔べらりくと「投げちら  
す、無法不敵の石原逸見、透を伺ひ切かしる、身をかゝして鉄拳頭びつ志  
やり石原藥罐兀あたまみぢんよ碎け逸見傳吾、一度よ息いたへよけり  
テ氣味よし心地よしに矢の有所ハ畠山都も有ハ一大事、かくと様子を

若殿の、身の上も覺束なし、一先館へ先我君又追付て事の次第を  
や上思案そ有んあら金の、土砂踏音猛虎の駢獅子奮迅の勢ひ、實も新  
田の十六騎、其隨一の勇士の孝父も父たり子も子たり二代の忠臣篠塚  
が武勇を代々傳へける

## 第二

月の名所を引かへて爰やかしこの駿波矢並繕ふ小手差原靈たばしる  
武藏野の、空物凄き氣色かな、新田左兵衛佐義興公勅命もだし難ければ  
今度の合戦、討死と覺悟極めし軍立驅違ふ馬煙太刀の鐸音天地又響、  
日を招く魯揚が勢ひ山を拔、項羽が力も是よりいかで増べき瘞す去ぬ  
戦よ、さしも多勢の鎌倉勢、色めき立て見へよける追來る歎を喰留んど、  
鎌倉方の侍大將江田判官景連家の子郎等前後を圍、太刀抜かざし懸向  
ひ、手を碎たる衝きよ勝ほこつたる官軍も少し志らけて見へたる所よ、

比興ニ旁竹澤監物秀時是又有と呼ひつて、判官目懸討てかゝれば、家  
來の主を討せじと懸塞るを竹澤が縦横無盡と討ちしらせば、叶ひぬ歟  
せと逃ちるを遁さじやらじと追かけ行其隙ニ江田判官漸と逃のびて  
味方の加勢を松原よ鎧突して居る所へ取て返す竹澤監物まつしくら  
ム懸付れば、判官も駆向ひ丁くはつしと渡り合、暫しが程ハ戰ひしが  
双方太刀をからりと捨互々むんづと引組で、えいやくと揉合しが傍  
見廻し起上り、塵打拂ひ小聲よ成ノウ判官殿其以來ハサベキ敵味方と隔れ  
バ互々書通の取遣斗シテ其元の手都合ハいかゞも彌上首尾く、初の程  
ハ義興めも中々微塵も氣をゆるさず、欺すよ手なしと此監物さまド  
の忠節顔今でハ譜代同前ニ心置なく軍の相談夫ハ重疊兼て志めし合  
せし通いつでも貴様が討て出るを、味方ハ逃る、貴様ハ追手柄みさせ  
て義興よ、取入せんと思ふ故、先程ハ此判官も足早ニ逃ヤた、イヤとふもいへ

ぬ逃ぶりよつ程下地が有そふな、とみが笑ひ、監物殿、義興が氣を  
赦すこそ幸、飛かしつてすつぱりへまけも亦い事く、そふ早まる故先  
達ても吉野で貴様大志くござり、おる通り力へ強し、打物取て、鬼神同前  
古今より稀な早業手利、ハナそんなら所詮、いけまいか、いかぬ所をやるが工  
夫、釋迦でも喰せる我等が方便委しく、此白紙と渡せば取て不審顔、何  
此白紙が思案ど、まゝ假初ならぬ密事の計略落ても人の見ぬ様よ、此白  
紙認め置水みひたせば皆讀る、ヨリ、おそろだ出來た、上分別と點き囁  
き乞めし合する折から又も聞ゆる人馬の音、同任せと渡り合、二打三  
打、仕組の狂言逃るをやらじと竹澤監物、返せ戻せと追て行義興公の只  
一騎、尊氏も近寄て一時、勝負を決せんと駒を早めて駆給ふ、大將と見  
るよりも一度、寄来る鎌倉勢、八方より取圍、我討取んと切てかしる、シヤ  
物よしやと懸向ひ、追かけ追詰切まくる神變不思儀の太刀風よ、吹ちら

されし木の葉武者、むらくばつと逃て行<sup>開</sup>數又もたらぬ、雜兵共うぬ  
らを目懸る義興あらず<sup>イテ</sup>尊氏<sup>スル</sup>見參と、乗出さんと、乞給へ、馬<sup>ハ</sup>俄<sup>ハ</sup>  
高嘶<sup>ハ</sup>打<sup>ハ</sup>とあをれど進ね<sup>ハ</sup>、扱<sup>ハ</sup>此乞<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>伏勢有<sup>ハ</sup>覺へたり、シ何  
程の事有<sup>ハ</sup>と、進ぬ馬をあをり立かけ出し給ふ後より案<sup>ハ</sup>違<sup>ハ</sup>武者一  
人鎧<sup>ハ</sup>の上<sup>ハ</sup>蓑<sup>ハ</sup>打<sup>ハ</sup>かけ顔を隠せしかんとう頭巾<sup>ハ</sup>馳<sup>ハ</sup>行馬の尾筒<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>引<sup>ハ</sup>て引  
戻せ<sup>ハ</sup>推<sup>ハ</sup>參<sup>ハ</sup>成曲<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>討放<sup>ハ</sup>さん<sup>ハ</sup>安<sup>ハ</sup>けれと此義興<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>たる馬<sup>ハ</sup>引<sup>ハ</sup>留<sup>ハ</sup>  
との乞<sup>ハ</sup>らし<sup>ハ</sup>、ならべ手柄<sup>ハ</sup>留<sup>ハ</sup>て見よと一鞭<sup>ハ</sup>當<sup>ハ</sup>て駆<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>す、馬<sup>ハ</sup>駿足<sup>ハ</sup>乘<sup>ハ</sup>  
ハ達者<sup>ハ</sup>踏<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>す足<sup>ハ</sup>みどりくく、鎧<sup>ハ</sup>の金物からくく、互のかけ聲  
鄧泥<sup>ハ</sup>の音<sup>ハ</sup>谷<sup>ハ</sup>響<sup>ハ</sup>、武藏野<sup>ハ</sup>まだ枯殘<sup>ハ</sup>る初冬<sup>ハ</sup>の芒<sup>ハ</sup>かるかや敗<sup>ハ</sup>醬<sup>ハ</sup>乱<sup>ハ</sup>散<sup>ハ</sup>  
ぞもみ合<sup>ハ</sup>しが、きやつも忘<sup>ハ</sup>れ者踏<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>め引<sup>ハ</sup>つ引<sup>ハ</sup>れつ爭<sup>ハ</sup>ふ内<sup>ハ</sup>、頭巾<sup>ハ</sup>脱<sup>ハ</sup>  
見合<sup>ハ</sup>す顏<sup>ハ</sup>、其方<sup>ハ</sup>我家來由<sup>ハ</sup>良兵庫助信忠<sup>ハ</sup>、其意を得<sup>ハ</sup>さる今<sup>ハ</sup>振舞南<sup>ハ</sup>  
瀬六郎<sup>ハ</sup>其方<sup>ハ</sup>我家の政務を任せ古郷新田の城を守らせ、妻子を預置

たるゝ城を打捨來るのみならず、今尊氏を追かけんと、乘出せし此義興か、邪廣せし所存はし有ての事か、速々返答せよと以ての外のほ怒、兵庫助の義興の姿を見上思ひすもばらくくと涙を流し、君勅命を蒙り給ひ、大將たるほ身みて、匹夫の勇を好せ給ひかくかろト數ほ振舞、千斤の弩の鷹鼠の爲み發たすとや事へやさず、迎もよくほ存、都て此度の軍の様子、日々注心の趣みてとくと思案を廻すと、日比の軍慮、又違へせ給へば必定。今度のは出陣、討死とのほ覺悟と、睨だ眼、又違ひ有じ、是非ほ留めやさんとは館より六郎を残し置密より來つて様子を伺ひ、ほ所存とくと見定たり、ほ氣又障る事有共、恥を忍び身をこらし、年を重ね日を積ねば大功のなしがたし、一旦のは怒より身を失ひ給ひなば、誰有て天子を守護し、朝敵を亡して、公家一統の代となさん、情なき我君や、ど或い怒或い歎詞を盡し理をせむれば、義興公も内裏の首尾、我胸中を打明

て物語んかいやく、彼々打明語りなべ行先へ付まどひ諫んひ必  
定所詮決せし覺悟なれば止めらるしも六ヶ敷とさあらぬ体みてイヤトヨ  
信忠、夫ハ皆汝か廻り氣討死の覺悟とい思ひも寄ぬ一言目み餘る敵の大勢、  
士卒士官皆汝か廻り氣討死の覺悟とい思ひも寄ぬ一言目み餘る敵の大勢、  
士卒士官の心を勵さんと手をおろしたる我働きはたらきいか程よ御意有  
ても此兵庫が有内うち、一騎立の御働きごんりん金輪際こんりんざいお止め申、敵陣てきじん此兵庫  
が、一當とうとう御目おのこかけん君きみ暫く御休足あゆみゆきと蓑脱あわぬき捨て一さんよ、敵陣てきじん  
してかけり行、大將の御座所尋さがして味方の軍勢井彈正を始として、  
追およ駆かけ來り、一息ほつとつぐ所へ己おのが工たくみを押隠す惡あく智惠ちゑの竹澤監  
物、首二三級引提ひき來り實檢じつかんよ備そなへば、大將御覽らんじ、監物、數度すうどの高名手柄  
く、軍の様子ようしょなんとく、さんし頃日數どうじゆ日の戰たたかひよて、勝かつみ乗のたる御  
勢ぜい、兵庫ひょうこが荒手差加あらしゆけり、手ひどき味方の軍配ぐんぱいよ、勞れ果つかたる鎌倉勢、尊氏  
を始として鎌倉かまくらとして逃のがたり、此虛きよ乗のて貴討きとう給たまひ、敵の大勢皆

犯しと、工を隠す勧めの詞、こなたに固討死と、覺悟極めし軍なれば、いつの時をか期すべきぞ、天下の爲より朝敵、我爲より親の敵尊氏を、討すんば再び生てり歸るまじ、いざ追かけん陣觸せよと、勇みいさんで乘出し給ふ向ふる、かけ來るり由良兵庫助信忠かくと見るる引提し、敵の首投捨て、轡づらを乞つかと取、殿、最前も此兵庫が、詞を盡し申上しよ、まだ御合点が参りませぬか、ヨシ、漫間しき御所存、日比より替りしは振舞、天魔が見入ひな、一旦負し尊氏なれ共、鎌倉へ引籠らば中々容易貴がたし、一先古郷へ歸らせ給ひ、英氣を養時節を見て、討て出るが万全の謀と、お馬の口を引返せば、せきよせいたるに大將放せくとあせれ共、こなたに手強き忠義の一圖シテ、面倒など義興公、陣扇にて兵庫が、顔目鼻も分ず丁くく打と擲けど放さばこそ、アリ出陣の先を折、味方の英氣をくじく曲者、歎み一味か二心か、勘當シラフやそこ立され、主從の縁是限りと、扇を顔へ投

付給へ、まほ勘當とのお情ない、何國迄もほ諫と、又モ縋るを鑑みて、蹴飛し／＼あほり立て、諸軍一度よ進行、跡々兵庫の鞠れ果、留ても留らぬ若氣、是非もなき次第やとづかと座して男泣譬ほ勘氣蒙る共、追かけてほ諫と、立上る折こそ有、さつと吹來る麿木の葉土石を卷上／＼傍え捨たる陣扇、俱々虚空へ吹上れバ、兵庫の急度眼を付、心得ぬ此有様、捨置れし陣扇、土石と俱々吹上し、我君のほ身の上、善か悪か何よもせよ、扇の行方を見届んど跡を、志たふて「行空の上野の國新田の庄義興公の居城」といつば、上は嶮岨の山續き、松の古木の枝たれて、雲なき龍かど疑ひられ、下へきり岸傍つて晴ざる虹かどあやまたる塙より矢間透もなく乱杭逆茂木引渡し、要害堅固に見へよける比しも、小春中空や、味方の勢の木枯よ歎を木の葉と吹ちらす、武藏野の勝軍ほ毒き有へしと、臺所筑波ほ前まだ三歳の徳壽丸乳母が膝よいたいけ盛お傍の女中立か

ハリ歎みかち栗熨斗昆布銚子取持運ふお家の家老由良兵庫助信忠  
が妻の湊、一子友千代を乳母よ抱せ手づから捧る島臺も、君を祝する鶴  
龜よやたけ心の味方の手柄松よ寄たるに壽きに前よ直し玄どやかみ、  
同勝軍のに祝義ふ目出度存ますすると上ればに臺所湊か毎日の出仕  
大義く殊よけふハ勝軍の祝義迎心の付た上物、是まで日毎の注進よ  
一度も悪い沙汰もなく、十一分の味方の勝殊よ一騎當千の兵庫助も跡  
から加勢氣遣ふ事ハなけれ共くどく思ふハ女の常若や深入玄給ハ  
んかとよければよふて案じられる同そこハぬからぬ私か夫勝て兜の  
緒を玄めるに用心させませんと、跡から参る程なれば、殿様のお身の上  
夫の事よ案しハなけれと私が弟の篠塚八郎、まだ年若な氣丈者仕損し  
も有ふかと、是計が心がしりやく八郎が手柄の様子、とくろ委人聞て居  
る八幡はたでの働き流石お家の四天王、伊賀守が子程有迎一家中の譽沙汰。

きよい弟を持ちやつた、見や友千代があの氣丈同年でも徳壽より  
大がらみ見へるひいの、両親の血筋どちらへ似ても強からず、此若が能片  
腕と殘る方なき御機嫌調有難いお詞本よ夫よ、御家中の内儀達御祝  
儀申上ん迎、お次よ扣へて居られます、それへ皆大義く是へ通せの  
お詞よ侍女中の案内よて一家中の妻女達連て御前へ立出る思ひく  
の島臺やおどらじと氣を播磨漏君の御名も高砂や歎をさつと掃ちら  
し首をさらへの尉せうと姥五十餘まりの年ばいに流石思案の底深き井彈  
正が妻の水木谷の戸出る鶯の笠よ縫てふ梅の花勝色見せし先陣よ、心  
れ世利田右馬之助が宿よ残せし女房お鈴言ねど薄き唇の滯なき口上  
れ立板よ水長臺よ富士の裾野の思ひ付君の名字よ仁田四郎夫も籠れ  
る武藏野よ組で臥猪の牙よりも運の月形鎌倉武士三國一の高名も時  
よ大島長門か妻お浪といへど浪風も治る武功君が代ハ千代よ八千代

よさゝれ石巖の上の釣竿つりざな、軍の先生名も高き太公望といふ人かと、女中めいに寄て其譯を土肥三郎左衛門が比翼ひよくと契る女房めんぼうお辨べん、七福神の船遊ふなあそび玄げんつかり入た兵糧を、かつく布袋はくたいの、福祿壽身ふくろじゆみをかためたる毘沙門びしゃもん小手、鰐わいで夷いの大敵を、釣つり寄て打出の小槌市河五郎が勇力を玄めてゐる夜の睦言むつこと、いつがも内儀の名もおつが辻、家中名うてのぼつとり者其外お家ぢ睨近なづきの女房娘残りなく、皆それのの捧物廣間ひろまへせましとならべ置、勝軍のほ毒どくきお目出度存じますじますと、一度よ開く口紅や、つらりと並ぶ襦じゆ、染井の躊躇すゝか飛鳥の花、眞間の紅葉もみぢ、敗枝花寺を一つよ寄たるとくみて花々敷ひらぞ見へよける、ほ臺だいの機嫌きげんうるゝしく、何れも揃ふて奇麗きれいな事、爰ゑで皆も氣が詰つまらふ、奥おくへいて緩ゆるりつと酒さけでも呑のでたもやいの、友千代も寐たそふな乳母ちよも共とものふ詞ことばよ、ハツ一度よ群鳥むれの立や姿の柳腰やのかいどりの裾長廊すそながろう下さしめき連て入跡いりしきへ是ぞお留守おとずれの要石動うきいの胸

の玄めくしり南瀬六郎宗澄出仕の上下さへやかよ、金作りの大小も流まよ  
石お家の家老職かろうしょくと、云ねどあるき其人品玄づくと打通り、先以て今日  
ハ勝軍のに祝儀恐悦至極と相述れり、チ、六郎か近ふく、兵庫が行きや  
つて其後ハ軍の知せりまだないか、ア相役の兵庫助ナ上べき子細有て、  
軍の場所迄参りしかど、赤便も是なしと、噂うわさ取と成所へ、取次の女中立出  
て、武藏野の軍塲ぐんじゆ、兵庫殿の歸られしといふ間程なく、立歸る由良兵庫  
助信忠、積る苦勞の黒革威差誥くろかばおどしあしりたる胸板や軍出立を其儘ままで玄ほく  
として立出しが御座を見るる、ハアと計よ兩手をつき指真さしのまいて詞なし心  
ならねば女房めいぼう、思ひの外、早いお歸り、そして常ならぬ顔持おもて、臺様の  
お案じ、どふいふ譯わけかついちよつと、申上たがよいわいなどせければせく  
程屈詫くわざ顔何なにを女の小さし出た、御諫言かんげんがお氣きよ障さむり此兵庫を御勘當ごかんとう、御  
出馬のお供も叶かなず、あま面おもてさげて歸かつたれやい、御勘當ごかんとうとハどふい

ふ譯何科とか有てと驚く女房御臺所も御不審顔六郎おほひハ摺察すりよりて御諫言かんげんの其子細ちびハチレ勝ハサ、ム乗たる御大將、竹澤たけざわが勧すすめ、ムと、鎌倉を責落せらさんと、逸切はなぐたる御出陣、其意そのいを得ざる御振舞ふるまいと、申詞まことも終らぬ所へ、間近く聞ゆる響ひびきの音ニ何事なんじを見る所ところに注進ちゅうしんと呼よりく、表御門しめいもん又馬乘捨まのり、篠塚八郎重虎、鑑あみ又立矢たてや箋毛ひのけと折掛さりげ、真一文字まごんじとかけ付つけしが、ハット計ハットけいと息切そよぎし悶絶もんぜつすれば湊みなとハ駆寄くまよ氣きを慥たしか、ム持もつてたも、八郎はのふと呼生よぶる、六郎ろくハ聲高こゑひのく日頃ひのの勇氣ゆうき又似合そむあぬ振廻ふるまわ後あとれたるか八郎は比興ひきょう之重虎じゆうと、呼よれる聲こゑの通とおじてやむつくと起おきれば、嬉うれしや氣きが付つたかと、悦えぶ姉あね取とて突退つづけととかと座くわし、深手ふかで弱よる八郎はならぬと、心せかれし早打はんうち、悶絶もんぜつせしか口惜くち惜やと、齒はがみをあせば、六郎ろくハ誥たとかけく、様子ようしょハいかいか、何なんとく、さればいし我君わたくしより、武藏野の御出馬ばしゆ、勇いさいさむ味み方かたの勢せい、我わふとらじと乘抜のぞく、鎌倉かまくらさして貴せが寄よる、兼まて計はかりし竹澤監物たけざわ、江田判官こうだと心こころを合あわせ、矢口やぐちの渡わたしの

舟底ふねそこ又穴あなをくり明のみを差し今やおそしと待ぞどり、夢ゆめ又もいざや、白栗しらぐれ  
毛の駒げ又鞭打我君わたくしの諸軍しょぐん又先立駆かけ拔て、彼御舟かれのみふな又召給めしやくふお供とも又隨したがふ武  
士の、世利田大島井彈正土肥市河だんじやうどひを始はじとして主從しゆしゆ纏まつ十一騎いちきゑいいく聲  
えて押おさ出す、固名高ごめいこうき玉川たまがわの、余所よしょの時雨しへに水みずかさ増ますり、矢やを射いたとき川中  
えて、兼あわて仕組しづみの舟子ふねこ供怪けが我わたくしのふりみて櫓とうを取落とちおちし、舟底ふねそこのしみを拔ぬく水  
中なかへ飛入ひりゆうく、行方あひたらずく、り行向むかふの岸きし又江田判官こうだはんがんこなた又江  
竹澤監物たけざわかんぶつ伏勢ふせきどつと押寄おさよせて、射矢のめのり、霞舟霞くろ又水譬みづたとへづま、翹くびの有あべ、迫のせ遁のぶれがた  
なき御有様天魔あざまを欺あざむく我君わたくしも、叶かなへじとや思おもしけん、鎧脱よろひぬく間まもあら無念  
やと怒いかりの御聲ごせい諸共よしやく終つむ、よあへあくほ生害しやがい十人の人ひとも思おもひく、よ腹  
かき切きりそこはかとなく成行せいぎょうば、追おとし馳付はせつけふ味方みがたの軍勢ぐんせい、大將失おとさせ給たまふ上うり、  
生存命せいじゆめいて何なにかせんと、敵陣てきじんへ驅入くく、一人ひとりも残のこらず討死とうしと、聞きるひと、  
れ、余りの事こと又詞ことも出です、鞠果あきらかたる計けいなり、一間いつまの内うち又家中うちじゆの妻女さいじよ、聞きよ

絶兼聲を上一度よわつと泣出す。八郎の息つきあへず此事ふ知せやさん  
と暫時の命ながらへて、君のお供ふ後れたり、何れもさらばといふより  
早く咽喉をぐつと貫き息なへたり湊へ死骸ふ取付てコレ八郎殿様のひ  
遺言、お尋遊べすは用も有ふよ早まつた此最期コレのふくと縋り付あ  
あたこなたを思ひやりかつばと伏て泣居たるに臺所の忙然と歎み心  
空蝉のもぬけのこしよおれせしが漸心や付たりけん志ほくと立上  
り乳母が膝よ居眠りし若君を抱取コレ徳壽稚ささきけれ共大將の子、とつくり  
とよふ聞きやや父上の歎の爲ふはかなくお成なされたいの、母も一  
所ふ行程ふ、そなたの早ふ大きふ成歎を討て父上の修羅の恨を晴して  
たる官軍の惣大將義貞様の孫君清和源氏の嫡流と生るし果報ふ有な  
がら、二人の親ふ別れなべ誰を便ふ成人せん、母が歎も父上の最期も夢  
のすやくと志らぬ寐顔のいちらしやと抱きめく落る涙と泣聲ふ、

臣目を覺し若君おとこへ、いや玄やく聞ぬく、赤あかがほしいと、島臺の舟又取付わんばくも、數有臺の其中で此舟がほしいとい船の中よて果給ふ父上懸しといふ事を自然と出が知せたか、思へべく淺間しや場所も多きよ船の内、前後の敵よ取巻れ水よおぼれて生害じゆがい此世からなる地獄の責せき、嘸あざ無念口惜かう、そふとの玄らすたつた今迄祝ひざめく此嶋臺、舟と聞さへ恨めし、七福神の富榮も、夫よ別れ何かせん鶴龜の千代万代齡よみ、嘘うそか偽うはりか、高砂住の江相生の松よも夫婦の有物をばかなき我身あぢきなの世の中や祝ひへ却て逆様事、此嶋臺もいまいしと、取て投はり押碎おしびき物狂きみだらけへしき、風情よて泣涕なきどこがれ伏縫ふくふ、六郎も顔ふり上、此度の鎌倉責せき、其意得いたくすとい思ひしかど、道よて變へんの有んど迄り、思ひ設あつぬ災難周じがいわちの昭王漢わたくわんを濟濟よ、船人共是を憎み、膠にかばを以て船をかため川中よ至る比膠ひあわせ湯ゆて船碎くだけ、水中よて失ひし方便てたてよ等ひそき竹澤たけざわが謀はかり某もの供

するならば仕様摸様も有べきよ、乞なしたり口惜やと、無念の拳手の  
裏へ爪も通らん風情よて涙の玉のばらくく、空よ乞られぬ村時雨  
余所の、見る目も哀なり、一間の方よひ女中の聲ド、御家中の内方達、君  
の御最期面々の夫の別れを悲しみて皆も自害致されしと、聞て驚人ド  
より御臺所の心付<sup>ハア</sup>死ふくれたりさらばぞと、守刀を拔放し、自害と見  
ゆれば湊ハ押留<sup>ハマリ</sup>悲しいハお道理ながら、今お果遊バして、若君様のふ  
身の上<sup>アラソ</sup>最早かふ成御運の末、生てうき目を見んより死せてたも  
と争ふを、六郎刃物もき取て、御短慮成御振舞お家の事も若君の事も  
忘れての御生害ならば御勝手次第と呵られて<sup>スリヤ</sup>死るよさへも死れぬ  
ハよくく因果の此身かと歎けば、湊も諸共よ、お道理様やと斗みて又  
さめトと泣居たるかしる歎の折こそ有物見の軍兵かけ來り、我も遠  
見致せし所遙向ふよ高煙數多の軍勢此城へ押寄ると相見へたり、御用

心ひへと言捨て又引返す。そもそもいかみどに驚兩人騒ず扱こそく、竹澤が軍勢共押寄ると覺たり、先々奥へ御入と、湊が介抱漸と一間の内へ入給ふ六郎の心せき。<sup>ナ</sup>兵庫殿固無勢の此城へ、勝はこつたる竹澤が、大軍を引受る、貴殿の軍慮の何とでござる。先、貴殿の御工夫、此六郎が存るより我君の吊ひ軍命限り歎を防叶ぬ時の城を枕討死の外思案へござらぬ。又貴殿の思案、此兵庫が存るより寡の衆より敵すべからず、及ばぬ事より大死せんより兜を脱旗を卷歎へ降るより外へござるまい、何敵方へ降参とり、氣が違たか狼狽たか、氣も違はず狼狽も致さぬ共、所詮叶ぬ腕立せんより、降参するが當世かど存る貴殿もとくと分別有と、落付程猶せき立六郎。<sup>ヤ</sup>分別もへちまもいらぬ身へ八ツさきよ成迹も、二君よ仕る六郎ならず、夫の近比若氣の至り、管仲の歎へ降り、霸王の助と成し例ためし、<sup>ヤ</sup>あまぬる毛唐人の引事、今歎へ降ての臺

若君のひ身の上、未來の主君へどの面さげては目見へあすべきぞ、比興未練の畜生侍、詞をかゝずも身の穢汝が様なる臆病者けがれやうびやうしゃへ牛蒡程な尾を振て鎌倉武士いぬと犬つくばい糠ぬかでもねぶつて命を繫つげど、惡口たらぐ六郎いさぶの壘たき蹴け立て入いみけり、何思ひけん兵庫助ひょうこすけすんと立て身拵そごうへ、奥おくをして入いんとす出合あわせ頭かしらよ、女房湊めらこ最前からさいぜんからのせり合あつあつを開ひらて居ゐたが、眞實じんじつお前まへの敵方てきがたへ、降參かぢさんあされるお心こころかへ、くどいく、尊氏そんじ方がたへ降參かぢさんの手土產てうさん御臺ごだい若君引ひくひつて連つづて行ゆ邪摩じやまひろぐなど突飛とくひすを、起直あがつて玄あんがみ付おんあきらて物ものが云いれぬ大事おほい事ことのこと、お主様おしゆじやう御難義ごなんぎの此時節命限めいげんりお力ちからみ成なせで、科とがあき我わを勘當かんとうし諒いさぎを用もちすむざざと、殺ひされし馬鹿大將ばらふだいじょう、新田しんでんの家いえよあいそが盡つくた、勘當請かんとうせいたりや主ぬしでもなく家來いえらでなし、御勘當請ごかんとうせいたりは是迄そこまで御知行ごちゆうみて、育そだてられたお前の體からだ、何なにとも有是迄そこまで、一方ならぬ御よしみ、思案仕おも案仕かへて下さりませど、夫思おもひの眞實心じんじつじん

取付歎い、めろくと邪摩ひろぐなど、突退つづきのけ刎退行はなはりんす、裾を押おへてコシ、  
待た待まちやんせ、譬連添夫たゞへよもせよ、お主の大事ことよやかへられぬ、そふい  
ふ汚穢さいお心なら、夫迎用捨むけようすへない、細言こまごんいへずと爰放はなはなせ、  
がみ付まわ面倒めんどうなど取て組伏用意くみ伏用意の早繩手はしゆはしかく様柱ようじゆよくしり付つけ、  
が夫を見限みれこ此方こちらよも飽果あらがた、夫婦の縁縁も是限り、女房去よたと、睨付にらみ一  
間の内うちへ入いみける、跡見あとみ送おりて、女房めらうの胸迄こぶしせきくるうき涙なみだ、けふけふいか  
なる惡日おのぞや、殿様どのさまよふ慮おもの御最期ごさい、たつた一人の弟おとうを殺ころし頼の思おも  
夫およ去はなれ剩あまつ此繩目このひもかふいふ因果いんざいな身みの上うが又また世よ有あふか、とくどき立  
くとふと倒たおれて泣なき沈しづむ大手おほての方ほうよふ敵のぞの大勢だいせい、四方よのを取卷責とがま太鼓だいこ開あ  
をとつとぞ上あがみける、湊みなすつくと立たつ上あがり、扱あ敵のぞの寄よたるかほ臺様だいさま六  
郎殿ろくろうだい、此禁解いきよしめてほしい、チエ恨うらめしい我夫、女ながらもお家の大事大事みすく  
詠よめて居ゐられふかと命限じゆげんり根限ねげんり起おつ轉ころんづ身みをもがき、岩いわをも通とおす

女の一念繩（思）みすらるゝ柏の柱、陰陽激して火を生し繩（思）に燃切どつぱり  
と、こけても打ても厭（いと）へこそ有難（がた）しと一さん（のうさん）よ奥をさしてぞ走行、程な  
く寄來る敵の大將竹澤監物秀時、真先（まつさき）よ踊出、鬼神と呼れたる義興さへ  
討取（とうしゆ）へ城の奴原皆殺し一人も遁（のび）さず討取と込入んとする所へ、降參（こうさん）  
と呼ひつて、立出る兵庫助、竹澤見るゝ心得ぬ汝が降參、其手をたべる監  
物ならず、ア其（か）疑（ひ）ひ尤（うる）論より證據手引して、此城を乗取せ、拙者（しやくしゃ）が心  
底見せやさん、其詞（こと）よ相違あくべ、尊氏公へ上恩賞（じょうおんしょう）望（ねら）ム任せん去  
ながら、降人（かかわら）の法なればべと家來共合点と兵庫一人を取圍（かこみすき）透（とお）もあらせず、  
乱入湊（みなと）の身がるよかいド、數長刀小脇よかい込んで、臺所を先よ立、透  
間を見て落さんと心を配る向（むか）々、竹澤が家の子笛目兵太、大勢引具しど  
つと押寄（おの）遁（のぶ）すなど下知すれば、心得たりと女房がくも手かくなり十  
文字追立られて敵の大勢、逸足出して逃行を遁（のぶ）さじやらじと追て行跡

又は臺たハテテあふく、長追無用ながとしむようとあせる内うち、後あとへ廻まわつて筆ひの兵太ひょうた、してやつたりと飛とかよる、透すきもあらせず立た歸かり、斯かと見るゝ湊みなが早業わき長刀ながと、血みづと、一所ひとえ兵太ひょうたが首くびころりと落おちて死死でけり、サアく申御臺様みそらだいさま、若君様わかみさま、六郎殿ろくろうでんがお供とも申せしめハ氣遣きうつひない、裏道うらみちを早ふくと、ば臺たの手てを引逸ひだき參さん、といづく共ともなく落おちて行ゆ、南瀬六郎宗澄なんぜろくろうむねづるの徳壽丸とくじゅまるをかき抱いだき、上うよ腹帶はらぶたい玄くわつかと玄くわめ拔身ぬき引提眼ひきを配くわらへ、素肌すはだながらも心こころの誠まこと、釜石鉄かまいしつの、たてつく者ものもあら氣げの若武者わくぶしゃ、取卷とりまき士卒しそつを蠅あぶ虫むし共とも思おもひぬ心こころの大丈夫おおじょうぶ玄くわんづくと落おちて行ゆ、一間いつまの内うち高聲かうせいよヤく六郎ろくろう命計めいけい助すすてくれん、徳壽丸とくじゅまるを置おきて行ゆと、呼よかけられて六郎ろくろうハきつと、後あとを見返みかへれば、一間いつまの障子しょうじさつと開あき床ゆ几ご、よかしつて竹澤監物たけざわかんぶつこなたよハ由良兵庫よらひょうこ鎧兜よろひのかぶと、身みをかため、采配さいはい追お取とゆうくとさもいからしき其形相そのぎょうそう六郎ろくろうハ齒はがみをなし、新田代々しんでんだいだいの此城このじゆを朝敵あさぞのの蹄ひづめよ懸ほんぎやくられ叛逆ばんやく不道ふどうの悪人原あらわら、乘取のりとれし殘念ざんねんや口惜くち惜や

さあれ若君のお供でなくば、うぬらを助置べきか、命冥加な盜賊共、德壽君ハ六郎が懷よ入奉ハ、千騎万騎のお供も同前道おつ開て早通せと。下知よ隨ふ諸軍勢右往左往よ取巻を、廢すさらす切結ひ爰をせんと、戰へべ、敵の大勢たまり兼志どろよ成て引退く、さきたあし返せと呼つて、火雷神の荒たる勢流石の二人も底氣味悪く、奥をさして遡入バ、比興至極のうづ出めら目よ物見せんと懸寄しが振返つて、天よも地よもかけがへなき若君のほ供せん。此隙よ立出る手並みこりぬ大勢が、又むらくと追取巻、性懲もあき蚊とんぼめらと、當るを幸切立られ、多勢を頼みの雜兵共一度よばつと、遡ちつたり、六郎も數ヶ所の深手踏きめくたどり行城内よハ諸軍勢どつと上たる凱歌を、聞も無念と立留りしが、一先此塲を立去て行方知さる義星公、ほ家門脇屋義治

公和田楠を始として、官軍一味よ心を合せ、若君を守立て時節を待て本  
望を遂、今之恥辱をすゝがんと、無念ながらも出て行、阿斗を助し趙雲が  
長板坡の働きよもおさく、劣ぬ其骨柄、古今獨歩の忠臣やと感せぬ者  
こそなかりけれ

第三

東路あづまを登下りの街道かいどう、武藏相模むさしがたの國境さかへ、往來わうらいの足休め能程のぎはざまヶ谷ケヤとつか  
の間あいだもたへぬ族人ぞくじんの櫛竹輿くじきも爰こゝ立場たちばの茶屋ぢやが軒所のきの名なへ焼餅坂やきもちざか、  
往來わうらいの道者だうしゃ腰打こしかけつけ、茶茶一いつ下されもふ何時なんじ亥いやぞぞ七しち過ごでござ  
りまえよナント川崎迄川崎行ゆれふかのキ川崎迄川崎心元こころない神奈川泊とりと見みへ  
まする、アリヤく太郎左さわりや夕アのよとり肉にく亥いめたなく、何なにをいふぞい、  
アアねたふく、腕うでハ松まつの木腰こしハ白泣聲しらなきこゑ猪いの似そたりけり、いふなく夫おとも  
今朝立際きさよこそと二百あぜやつた有様ありさまハおれも約束あくせきしたけれどおれが

所へいうせなんだ。そこで手前が焼餅か、夫で思ひ出した爰の坂を焼餅坂  
といふけなの、ウレ亭主イヤモ此坂ス付てきつういばれ謂アサヒがござりますふ咄ツヅしや  
ま志よか夫聞てるたら日がくれるあれ、ク腹カゲンの加減カゲンも七つ過ドリヤ茶代拂ハラフ  
と、一錢二錢錢つく杖ツバつく道者共別クよ急行又ウカ往來カムカムの街道筋カムカムから  
が殿様ナニ姫路ヒルをとりりやる。そこで姫路が繁昌ブンジヤウするといナエはてつばかり  
め高か十二三貫目の荷附ながら塙シカの明アキシヤウ畜生ヤクシヤウめど時めく雷聲馬カムカウの上  
から湊シカの聲かけ、ヨレ馬士殿私マジイシタシの馬マはじめて乗た、落ふかと思ふて強コロ  
てくシどふもならぬ静シカあ程こつちの勝手、殊シテ竹興タケイよ召マシたハ大切コロなわ  
しが御主人ちつとの間も離れて氣遣ヒダリひ、此竹興の衆ハどふじやぞい  
のふチ、氣遣ヒダリひハござりませぬトカハヂ東海道ドウカイド五十三次ゴジサンジの云ハシ及ハシべす奥街道迄オカドウガタニ  
を股ハシみかけて居る此長藏ナガザク、わしが呑込ウツムだ仕事ハシ、もふ爰ハシへ見ハシべるハシ、ハシ早ふ  
うせやがれヤアとどやげハシ跡ハシからいきせきと登坂道ミタカドウた山竹興ヤマタケイの雲助ウネ助

共、肩かたもあたまもちぐはぐと漸よくと追付つづけて、タクと寒言さむごんよ早はやくと價おのれの馬  
と人間を一イチだと思ふかやい、けふけふにあまり貰うなががあさみ新町の宿はづれ  
と畫寐ひるぬして居たが、何するも錢設せんせつだと願西と云合て新町から戸塚迄百  
五十の駄賃ださんかふ急いで立場で一イチぱいせふやならない。願西、チじつと  
してゐると寒さむい故荷ごはを持てあたしまるのた、長藏我屋ながざわわやが何と旦那  
と願ふて一イチぱい呑せのめいチマサ何なんともいふな爰とねが泊り玄とねやこれく六兵衛  
殿殿お泊りのお客きふくを乗のて來たと呼よひ亭主ていしゆが走出なげく是へと店先みせへ湊みな  
馬ばを抱いだおろせばま思ひの外早い來樣跡きようせきの宿から三里よひ近ちかい、モモ爰とねが  
戸塚とつづかとやらいふ所ところかへ、ヤ爰とねといふを打消す寢言ねんごんの長藏ながざわ成程せいじゆ、  
爰とねが戸塚の宿とつづかに亭主ていしゆと目めで知しすれば亭主ていしゆも去さる者もの、いかふも爰とねが戸塚で  
ござります、そしてお連つれ、ヤ連つれといふいふ私が主人お主はくはく是へと昇寄あがさせ  
いざ御出かいたせと介抱かいはう、義興よしひの御臺筑波御前ならぬ旅たび、身みもやつれ立出給

ふ御姿、薬屋の軒、又三ヶ月のみがしれ出る其風情、長藏の現をぬかし、何と二人共よ見たか旅やつれでもある器量、旅籠屋のふんぱり共との伽羅甘譜、程違つて美しいもんではないかあんな物を抱て寝る男めの憎い奴じやないかいやい、コリヤ長藏わりや何ば所の名玄や迎いらぬ焼餅だな、そしてつまはづれといひ物ごしどいひ、先お前方へどこからどれへ行玄やりますと問れて湊が、わかれく、ハ武藏の者頼みしお方の御病氣故、箱根へ湯治よ参る者と云紛らして、コレ主のお方奥へ參つても苦しむからずれあの一間へ、成程く御念よ及バぬ、サアく是へビ亭主が案内湊も詞そくく、又一間の内へ入跡よ願西ハ大欠、ヤレく草臥たく、コリヤ長藏わりや爰を戸塚だ連女を歎し、爰よ留たれ何ぞうまい仕事が有か、他人よせすと半口のせぬか、ナ野中よそれく戸塚逆行を爰で仕舞仕事故、だまつて居たが何ぞ是よハ譯が有ふ聞せいやい、ヤ譯といふて高が

かふだあの竹輿たけこし乗て來た女めの我等首だけ供ともいふも女の事こと今宵中  
よ一太刀云せたい思ひ入夫で戸塚とつか入込の旅人、聲山立ても遠慮のな  
い様よう此立場の雲助宿を、戸塚の宿だと欺まして連て來たのだ、何と智惠  
かくどうぬ惚はれのだみそい鼻はな顕あらわしたり、願西手ねんにし手を打扱うちあつも玄くろたり、戀うれ  
の智惠ちゑ又格別ごくべつおれわれ又あまたの供供の女めの久くしぶりの女犯肉食にくほんにくじき、くわれも其心  
かサ二人ながら相談あいだんきまつたくく野中のなかよわりや何なんとするすおり  
や女めの一ぱいやつてぐつと寐ねたい、そんなら前祝まへゆきひよ一ぱいづづ己おのが  
もめるまつといと、山さんも見みへざるそら祝まへゆき、實長じつちやうはんの當吞のうのんや咽ののを、ならして  
入いよけりよけり、痛いたしや、筑波つくば前まへ、見るもいぶせき葉わらやの軒くらわん、湊みなと障子押明しやうじよめい  
て、暫く是これみて旅たびの憂うきはらさせ給たまへと進すすれば、臺だい思おもひの顔おほを上あが湊みなと  
自みづから身みづみの上程じょうじょう、世よあぢきあい物ものになし、二世にせいと連添れんたん我夫がふ、思おもひ設おもはぬ  
最さい期ごいとし可愛かわいの我子わがこよよ生別おはなし、惜おもからぬ命みことながらへしも、何卒どうぞ德壽とくじゆ

を世よみ立たてんと、夫おを頼たのみ此この艱難かんなんそなたののいかい心遣こころひ、あかぬ別わかれを忠義ちゆうぎよかへ男おとこ勝まさりのかいドだ敷ひら、長ながの旅路りょりの介抱かいほう若煩わづらひでも仕つかやらふかと思おもひ過くわして悲かなしいと、跡あとの涙なみだと詞ことばさへ曇くもりがちあるは顔おほばせ俱とも悲かなしき、涙なみだを隠かくし是こゝアふ心弱こころよい其様そのようと思召おぼしめして長ながの旅りょりが成なませふか、義治様よじやうへお前まへを手渡てたずしする迄まで、めつたよ風かぜも引事ひじじやござりませぬ、私が夫お兵庫助ひょうこすけ思おもひも寄よぬ二心にごん故ゆゑ夫おを捨てお前のお供とも又南瀬六郎殿なんせいろだん若君わかみを御介抱かいはう、何卒どうぞ尋逢しゆもうたなら仕様しう模様もやうもござりませふ暫しばしの間まのは艱難かんなん必ひきなく思召おぼしめしぬがよふござりますと、口くちよりいへど心こころより是これが新田しんでんの奥おく方がたのは有様うようかと打うちしほれ、見みかひす顔おほの花はなくもり上うへ見みぬ鷺すがや鶲眼くまたか、寢鳥ねねさんと寢言ねごんの長藏ながざぶ、願西がんせいが二人連つづいて、奥おく立たつ出で、若女わらわ中様なかよ嘸うなづお勞つかれでござりませふといふ又惄びつり泣なみだ顔おほ隠かくし、そなたのさつきの二人ふたりの衆しゆう、何なにぞ用もちばし有あての事ことか用もちといへば用もちの様ような物ものを願西がんせい、ちつとお前方まへよ

アノナヨリヤく長藏おれ又斗云せすと我もいへ、マアあたま役じやわれからいへ、  
キヤわれから、くくくく、二人共々云ふくいといふハ酒、でも呑たい  
故價あなたをくれといふ事か、アイまあそんな事もよほん志よが、ちつと御無心  
がござりますシテ又外又無心といひ、お大事の物で、有けれど、お二人な  
がらアわしら二人を今宵一夜抱て寝て乳を呑せて下さりませ、エ出家一  
人お助なさるハいかひ功德でござります跡も先もたつた二人ど  
ふぞ取せてやつてくだりませと、思ひがけなき一言又御臺ヒタチとかふ  
詞もなく、ぞつとこひげの胴震ボラボラひ湊も聞て、恵ハセりの驚胸を押志づめ弱み  
を見せじと膝立直し、ヤ身の程玄らぬ慮外者女子玄やと思ふてなぶつ  
たらあてが違ふ長の旅を女の身で主人の介抱覺がなふて成物か殊  
れつきとした武士の妻今一言いふと歎スルガさぬぞと尖き詞、長藏ヒロシマ  
何と聞たかこりい事ハルだないかいやい、そふ強ふ出やりやこつちも意地、

云かゝつた色事、よふ聞えやれ、戸塚の宿と歎して留たひおれが思ひ  
を晴そふ斗、爰へ武藏相撲の國境、焼餅坂といふ立場、一里四方、此家た  
つた一軒泣ても詫ても外ぬ人、一人もない。願西よ、そうだ是非いや  
だといやりや引縛つて抱て寐る、アどうだくと二人して、戀の手誂の  
居催促、聞程つらき身の難義、遁がたなき一世の灘湊へ思案し笑顔を作  
り。夫程よ迄思ふて下さるお心を、何の仇よ成物ぞ、私らも長旅の獨寐  
有様、こつちから、ヤア、夫の夢でないか又有かくのうそでないか、ア  
嘘か誠ひ寐て知ると脊中明けペぐみや／＼／＼、アさつぱりと琢  
明た、此長藏の近飢手附よちよつと口もとすがり付を湊へ押留、あなた  
も私も顔見合せて、どうも恥しい互に見へぬ様よ目をふさぎ、めんあい  
ちどりかけてなら、イヤモウとふありと君の仰へ背きやせぬ、幸爰よ幌巾が、  
おつとよしく、わしがする様よならんせど、脱巾取て二人共湊か手早

くめんないちどり引志め／＼是からこつちも目隠しする用意の内  
見まいぞといへば二人が合点だ、支度よくば志らせてと心にもぬけの  
から衣きつし駒よし襷引上湊ひは臺よ目くばせし早ふ／＼の目遣ひ  
よ毒蛇の口や門口を抜ては臺の御手を取轉つまろびつ漸と行方志ら  
ず落給ふ跡よ二人の夢現ゆめうつサク女中様早ふ寝たい聲のせぬりおもたせ  
ぶりか難面づれまんぞへ／＼願西よどこみ居るぞ最前からだまつてゐるわ  
やきまつたな／＼何をいふぞいやいさつきよから盲搜めぐらさがしよさやつて  
も知ぬぞよ、ア我もそふかおれも知ぬ、あた面倒めんとうなど帨巾てのきぬかなぐり傍わなぎ  
見廻し、アく女めいうせぬか、腹の立撮たてさつれた遠く行じぼつかけよ、合  
点とかけ出す向ふへ、竹澤監物が家來犬伏官藏、主の權威を鼻よかけ供  
人引連歩来る所の名主が先よ立、是／＼亭主何か御詮義者が有迎人吟ぎん  
味泊みりの衆も皆是へと、いふよ亭主が罷出、ヤ私が所の雲助宿御氣遣ひ

な者ハ一人もござりませぬと聞る宮藏。やつとねめ付。其雲助が猶不審、此度新田義興の家來南瀬六郎といふ者義興の伴を連此邊を徘徊するよし依て宿の旅籠やを人改め、己が内の泊人殘らす是へ呼出せ、爰に居る坊主め、合點が行ぬ己ハ何故其ざまア生國ハいづくの者と、問れて願西錫杖振立奇妙頂來のら如來抑わつちが國ハ上州幼い時から穴一小博奕、色事覺へて十四で勘當寺へかけ込和尙の大黒盜んで欠落、商ひ知ねば喰込斗、女房ぐるみニ博奕ニ打込夫ニもこりず年まゝはまつて盈ござぐるめよくるむき裸ニ坊主ニされた去とへくうるさいこんなだニ次ニ盲の伊勢参り幟片手ニ聲はり上奥州仙臺ニ伊勢様へ、十三度参りの盲ニ報謝ヤラガ様など盲ニ詮義ハないとつとシラセイときめ付られ詮義があいとハ有がたい只今のお心さし、伊勢太神宮様へ上ますでござります、まめ／＼まめ息災延命ニよふお守り

なされて下さりませ。——はうへ急ぎ出て行、扱其次へ出てくるへ、是  
戸塚の名代物、云ねど皆様ほぞんじの狸たぬきの、羣西鼓さんせいこ、あらぬたゞき鉦、  
撞木杖うちゆきしやくつき漸よみがへと表をさして出て行、次へ差詰さしづ野中のの松、ア私ア元角力好、  
ア角力と云ふ物ものの怎どうやう事こともあい物もの、大き大きみけがを致いたました夫めでも角力  
取ならかふえ、何なんの事ことたた、こいつへ、儕ぼくに氣違きそだな、役えも立たつぬ奴  
等ひと隙ひま取とた併あわせ只今申渡まわした、南瀬六郎見付次第からち搦なめて此官藏くわんざうが旅宿りょ  
へ連來れ、褒美ほめの望次第わくじ百姓共次の宿すくへ案内あんないせよ、早はやふへと云渡まわし、皆  
引連急いそぎ行、跡あと長藏ながざわ一人笑わら、何なんと聞きたか二人の者もの、さつき跡あとの松原まつばらで  
がんばつて置おきた金かなの蔓つる、褒美ほめの分取奥おくでとつくり相談あうだんせふま、こいへ  
と三人さんじんハ打連たれん奥おく入い、けり既すで其日そのひも入相いりあいの鐘かねの響ひびきも、おのづから寂さび  
滅めつ爲樂めいらくも西にしの空願くうがんふの彌陀みだの響ひびき願力がんりょく、六十六部廻國くわいこく姿すがたを略さくす、南瀬六  
郎らう忠義ちゆうぎの重おもき笈むかわの中なか、錫杖しゃくじやくつくづく立たつ留とどり、實春じつしゅんの日の長ながきといへど、急いそ

ぬ旅のあてどなし、日が暮ふが夜が明ふが高が野宿の此身の上暫くつかれを晴さんと、笈をおろして傍ある傍爾杭打詠め<sup>カクヒヤウ</sup>何よ是より東武藏の國、是より西相撲の國、扱い爰こそ武藏相撲の國境と、四方を見廻し、笈の戸を開て四ツの稚子へ、義興の若君徳壽丸<sup>サア</sup>誰もおりませぬ御心よ、御遊びと、道の邊の花折取爰迄ござれ此花玄んじよ<sup>サア</sup>くほ出と膝ハラ乗撫<sup>ハラ</sup>つさすりつ六郎が機嫌取りよ道野邊の草よ露吸蝶<sup>ズフ</sup>との夢共わかぬ稚子の餘念<sup>よ</sup>いさらよ、なかりけりせめては是へと傍爾杭引抜て押直し、若君を抱のせ御顔つくし打守り、目見る涙押かくし、果報<sup>くわはう</sup>いみじく源氏の正統新田義興公の公達と產れ給へ共、足利尊氏<sup>スル</sup>世をせばめられ、纏<sup>わづか</sup>の笈<sup>スル</sup>身を隠し、お乳の人よも傳<sup>アガシ</sup>ふも付添者<sup>ハ</sup>某一人、かく浅間敷に身の上弓矢神<sup>スル</sup>よも見離<sup>ハセ</sup>されしか殘念やと、拳<sup>こぶし</sup>を握<sup>ハサ</sup>り齒がみをなし、無念の涙<sup>スル</sup>えづみしが去ながら、稚けれ共源家の公達、此六郎

がナ事、能ふ聞なされや、今は足の下なる傍示杭わきし、武藏相模兩國の境杭、  
尊氏たかしの相模の國鎌倉かまくらに居を構かまつれば、時々取ての足利尊氏、武藏の國に今  
敵竹澤監物たけたけざねものが領分りょうぶん、二人が軍勢踏破よみきり、武藏相模を一時ひととき、踏破よみきへ給ふべ  
き前表せんひやう、夫を祝しゆくせし我寸志追付しゆく尊氏討亡とうぼうし、目出度みだ代ひるがへさんと祝  
ひ悦よろこぶ折ほりこそあれ、いつの間まよかいわ寐言みごんの長藏ながざ、南無三寶なんむさんぼうと若君わづかを手早  
く笈ひつと抱入いだあたふた玄くつめる兩方りょうぱう、同じく願西野中がんせいのなかの松三人一所いっしょ追  
取卷とりまき、中なかよも寐言みごんの長藏ながざが、六部殿ろくぶでん行暮ゆふぐれしたる追剝おひはさぎじやに報謝ほうしゃと預あらわりた  
い、心安こころい事ながら、此方こちらも人の情じやうを受うけて通とおる修行しゆぎょうの身みこと、貯たまへに迫おこり更さら  
なしと半分はんぶん云せす、貯たまへが有あ迫おこも高たかの知した六部ろくぶの路金ろきん、大金だいきんと成な其笈そのひつが  
貰もらひたいふウ此笈ひつがほしいとこ、常つねの盜賊とうぞくでも有あまい、早速はつそくやらふと云いた  
けれど、アならぬ、甘あまいへば付上つじようる、どふで直ただでいいかぬ奴やつ、二人共合点あわせか、  
合点あわせと両方りょうぱうから、組付首筋引攔組付首筋引攔右うと左ひだりへもんどり打うちせ、寐言みごんが透すかさす

後より、乞つかと抱を腰車ア面倒なる青蠅め此世の暇ヒマを取せんと、錫杖  
よ仕込し刀引拔切拂ふ、こなたハ乃物叶ハじと、見世の道具の手よ當る、  
茶碗盃ハたばこ盃授付ハ打付る、切拂ひ切拂ふ劍の下よ野中の松、此世  
の枝葉ハ枯カケルうせたり願西も手ハ負ハガぬ長藏有合庖丁追取立向ハシテへど、手練  
の六郎叶ハじと持たる出ハセ刃を授ければあやまたす、六郎が膝ハラの口へす  
つぱと立よろくとたぢろく中、いづく共あく逃ハマせたり、六郎の歯が  
みをなし、討ハシメらせしか口惜やと、庖丁拔捨下着ハサミの裾、引裂ハサムて乞つかと  
卷ハシム、取逃せしれ殘念なれど、大事のく若君のほ身の上が大切と痛手よ  
くつせず踏ハシムえめく、歩めどちがく、足曳ハシビキの、山坂よ氣を春の夜の、そこ  
共分ぬ脣闇ハラヤハラよたどり行こそ「是非なけれ由良兵庫助信忠ヨウヤウスイツハ二張の弓も  
引かたの竹澤ハチザワが推舉ハサエよて尊氏卿タクシキヨウへ官新ハシメよ所領賜りて不義の富貴の夫  
を共志らぬ我身の程ハシメケ谷ハシメカニや十塚ハシメカニの宿ハシメカニよ隣ハシメカニたる、所の名さへ吉田村傍ハシメカニ

目立一構手を盡したる物好の、庭又泉水築山の木々の梢を洩出る臘月  
夜又映ひし、櫻が枝の白妙も浮る雲とや詠むらん、鎌倉よりの召又依て  
主兵庫が留守の内、呵人のあい嬢共乳母交りよどつたくた、サ若子様の  
お馬が通る、ビシ高嘶たかひきまだぐりんせなき友千代を抱乗たる四つ這の生  
れ付たる棚尻たなづらりひこつかせてかけ廻れば、あぶなやと抱ふろしヨシ皆の衆  
旦那様のお留守じや迎やりばなしに騒しやるな、若子様をだしよして  
面々の慰半分、怪我させましたらどふ亥なさる、そしてマ有ふ事か、大あ  
脣ひじきを振廻してお鍋殿もか鍋殿イヤコレ人の七難しづかんより我八難、お乳母殿のふ  
るどじや迎、余り小そふもござんすまい、なんぼわつちが棚尻たなづらりでも見懸かね  
よ似ず上て有と、どなたでも譽ほめあさるよ、お松殿、そふじやないか、  
上つたの下つたのどり、子供の上の風巾たん亥や有まいしヨレ其蛸魚たこ少差  
合亥やと、どつと笑へバイ若子様の今すやく、大な聲よして下されば

んよ愛らしいお子で、有ぞ。此お子産だ母御が見たい。奥様のない此お屋形賓の身の差合せ、寡暮しの旦那様も、わつちが蛸魚で吸付たら、身も同前と相果ると、ふつしやるで有ぞいの、ア、お鍋殿とした事が、旦那様の石部金吉、女護が島へやつて置ても氣遣ひの氣の字もない。口先でちよびくさいふより、得手堅ぞふめがしつ深な、必油斷さつしやるなど三ツ寄れ、姦しい目口乾きの色咄し、折から旦那お歸りと下部が呼次聲よ連々野等かりいて呵られな、ヤ若子様も御一所よと、皆打連て入よける館の主兵庫助信忠、江田判官景連を同道よて、立歸る我家の内、先あれへと賓主の禮、上座よ直つて江田判官、先以て今日のは前の首尾も上々吉、此判官も去年の冬、さしも手強き新田義興、手もぬらさず討取し、莫太の勳功と、尊氏公御感の余り相摸半國を給り、此上もなき悦び、貴殿の固義興が舊臣、お疑ひも有んかと思ひの外のお取立、ア御意の

通此兵庫助新田の家を見限り足利家へ降参當時ケ様の活計も貴公と  
竹澤殿の取成御芳志の程言語より述られずと媚諂ひの挨拶より判官  
猶も近く差寄夫又付義興が弟義岑又伴徳壽丸今又おいて行衛知す少  
よても手がより有バ古主迎用捨召れなハヤ其御念より及ばぬ事死損ひ  
の新田の一類捻り殺す手間隙いらす夫ハそふと判官殿今宵も最早  
初夜過あれバ見苦しく共奥の間で夜と共の物語拙者も忍の道  
先今晚ハお暇アサフサテ夫ハ殘念千万イヤ我等領分を鎌倉の往來より丁  
どよい中休以後ハ一すくとほ尋アサフ然ベ其内おさらばと家來引連判  
官ハ已か館へ立歸る世をうき草のよるベあき義興のは臺筑波は前湊  
一人を力みて立らぬ夜道をとぼくと門外またどり付道踏迷ひし旅  
の女一夜のお宿といふ聲のほの聞ゆれば内より不審手燭携へ歩寄互  
よ見合す顔と顔思ひ懸なき拘りよ兵庫の流石面ぶせ入んとするを女

房へづかくと立寄て胸づくし取て引すへ、爰な人でなし殿落人と成給  
ふは臺様の此お姿、嘸本望でござん玄よのふ、お前の心一つみて、さまで  
のは艱難かんなんけふ迄お命續つづきしひ、まだしも神佛の扣へ網づき、世を忍旅なれば何  
か又付て不自由、がち、は臺様のお足の痛いたみ此家作りの結構さ一夜の無心  
と來て見ればどふかおまへの内そふな、かしる暮くらしで有ながらお主の  
事も女房の事も忘れ果たる無得心むとくじん、義理ぎり玄らず道玄らずと異見いふも  
よしみだけ、どふぞ本心もと立歸りお家のほ先途見届て、是迄の恥はずをす  
き元の女夫めふよ成てたべ、憎いうらみと日比の恨己うらみやれと、思ふて居たが顔  
見れば稚馴染心ちじゆせんじんが味あよ成て来て恨も漸百分一、友千代ともよの息災いきさいあか流行  
風など引ひせぬか、かふいふ暮くらでござるから、シヤ、お内儀様うちぎさまを呼よやな  
されぬかいな、どふぞ、いふて聞せて下されと強つよい様ようで女氣めうきの玄くわとけ涙  
えくれ居たり、は臺だいも漸顏せんがいを上、殿様とのさまより不慮ふりのほ最期さいご頼のぞみ思ふそなた

まへ尊氏へ降参、徳壽を連て立退し六郎が行衛知ねば、そこや、爰やと尋ても行先ゆきが敵の中東の住居叶はねば脇屋義治殿を頼よとして上方へ志し迷ひ來きたるも盡せぬ機縁ならぬ旅たびよつかれ果置所なき露あの身の消なべ消けぬ兎とも角かくもよきよ頼と計よて跡あと、詞こともない玄くろやくりくろ、いたゞしきに有様、お力ちからよとよたいがマならぬむかし昔むかし今いま、足利家の祿ろくを食此兵庫、新田方の落人搃捕ささらなれ共、女義の事なりや、了簡りょうかんして、見遁みといて、進せふ、足本の明あい中なかとつととつござれとよべなき詞女房ことわらぶ猶ゆうせき上う、聞きべ聞程きよあいそづかし、飼養かひかぶ犬いぬも主ぬしを知、尾おを振ふてそばへる物ものを、犬いぬ劣ひどつた人畜生じゅ臺様だいようお立遊あそばせ、行着次第じだいよさんじませふ、時世じせよつるゝ人心、是非ぜいもなき世の有様ありさまと、志ほしほしくとして立給たまへべ、心づよく云い云ながら、流石女の跡あとや先笑顔せんじやく、作つくつて傍そばよ寄より、國兵庫殿云いかしりよ云いいふたが、御臺様だいようのお足の痛いたみ殊こと々こと夜更よごて一寸いつばんも、おひろいひろいなさ

られまい、座敷みならずバ軒の下、木部屋み成共たつた一夜を、キならぬ。そんあらとふぞ友千代ミ、ちよつと逢せて猶ならぬ、夫婦でなけれバ子でもなし、とつとしうせふとあらけなき、詞ミ湊ハ身を震えし、御臺様のお供でなくば喰付ても此恨、人ミ報おほひが有物か、ない物か、覺てござれと見返りく、御臺所の御手を引、すごくとして出て行、心ぞ思「ひやられたり、されば其幹かん摧おぶる時ハ枝葉全じよまつたからずとかや、南瀬六郎宗澄おねづみハ數多あまたの追手を切抜て、忠義一圖いつミ若君わづかを漸脊せきミ笈くわの内うち、深手ふミ弱よる足あしたちく、此家このいえを目當めうよろぼひ來り、行暮ゆく暮せし族人しやくじんあるか盜賊とうぞくミ出合難むづか義至極しつげき、お家おいえを見懸みはらお頼申まことに、ほかくまひ下おろされよと、内うちへはいれバ、其方そのがたハ南瀬六郎なんせいろ、人ひと非ひ人の由良兵庫ゆりようへいこ、思おもひがけなき對面たいめんじや、ナア愚人ぐじんミ向むかひ詞ことハなし、しちゃく勝負じゆぢゆミ詰つかくれバ、血迷あせふたるか六郎ろくろうミ存外たわざの膽言だんごん所證助しよじょからぬ我命がめい、己おのが首くびを冥途めいとの土産どさん、ミ、血迷あせたぞ、その事こと、ナシト尊氏そんじ公こうの

御威勢見たか唐土天竺たうじゆへいざ玄らす。日本の地じえ在ていか程遺れ隠  
るし共袋の物ものを探さぐるよ等しく終まつよめ尋出されんそこを計そなつて此兵庫  
手短てぢやくみ降参こうさんし一簾の知行ちぎょうを取とり此通豊の暮はし彼蠍蠍ひきひきといふ虫むし、己  
が斧のこを頼たのみして車くるまみ向むかふ眞其まことにとく、汝汝が武勇ぶゆうを頼たのみして鎌倉かまくらへ弓引いのひん  
とい淺あさはかな了簡りょうげん、大な物ものみい呑のれ、長い物ものみい巻まれるといふ謡うたの通り、  
譬たといか程てい、働はたいても威勢いせみて取圍とりまくば、行先ゆきようが皆歎其上そのうより其深手ふかて、手  
向むかひむかふぽつかないま、道知じすがぬかしたり瓦かわらと成なて全まつからんより、玉  
と成なて碎くだよと古人の金言身みへ醯しづみなるとても、汝汝がとき不忠不義恩  
を忘わるし六郎ろくろうならずま、其理屈ねねこまり聞きたが、今某もしが討果うめさぱし其笈くわいの内うち  
る德壽丸とくじゅまる、誰だ有て介抱かいはうするぞま、とつくりと分別べつべつせよと星ほしを差さたる一言いつごん、  
イナサとふで遁とおれぬとおぬ命めい、但ただしの汝善心むながい、翻ひるがえり、かくまひ申所存まひしゆそんなるかま、かく  
まふ程ていなりや鎌倉かまくらへ降参こうさんせぬいやい、かくまひもせず、本心ほんじんも返から

ね共、高のえられた小笠一匹、鎌倉殿の害よりもならねば、見遁してやる分の事さゝ、しかと見遁してくれふや、究鳥懷よ入時の獵人も是を取ず、ア添い命惜むよあらね共は、一門の皆ちりど、義岑公の行衛知す、新田の家の血筋残り給ふる若君斗<sup>闘</sup>、大切の命見のがしてさへ下さるれば、ほ恩の忘れぬ、手を合して拜ゆどゆだんを見すまし近寄て、只一討と切付るを、さへかずつぱよて玄つかと請<sup>請</sup>、逆も及ばぬほどてんがう、其手で参るまい去ながら、木よもかやよも心置ひ落人のならひ疑ひ<sup>うなが</sup>、尤玄<sup>玄</sup>ごく、見遁すといふ其證据と、刀のこゑ口抜かけて、丁々々と金打し、深手の上よ氣をもせずとおくの一間で養生<sup>やうじやう</sup>お仕やれ、天よく<sup>ハ</sup>まリ地よぬき足思慮<sup>しりょ</sup>分別も愚み返へり、かくなり下る我身の上弓矢のめうがよつきたるかと、くらむ心を取直し、心ならねどせひあくも、奥の一間よたどり行程もあらせず、討手の大勢ばらくくと乱れ入、矢ぶ

すま作つて追取卷、何ゆへのらうせきと云せも果す捕手の頭、新田の  
小悴徳壽丸南瀬六郎を付込たり渡し有とのも忘れべ、人數の中より  
馬士まきのねとの長藏ながざわぬつと出コレ親方、金かね成代物じょうだいものを焼餅坂やきもちざかで取とみがし、追  
手の衆の手てよあまれば、どふでおいらが手てぎりよやおゑないと見へが  
くれよ付けてきて、おくへ入つたをとつくりと見て置た、四の五のあし  
よ渡さつ志しやれ、渡せよせと大勢がすきもあらせず誇ほかける、折おりもこそ  
有表おもての方、上使じょうしなりと呼よひつて、入來る竹澤監物けんもく家來共そこの振舞、  
皆引ひきくと追退しりぞけ、上座じょうざよ通れば、思ひがけなきは上使じょうしとよ、上使の  
越こき余の、義ならず、南瀬六郎徳壽丸、最前道まへぢよて討うもらせしと追々の注  
進な尊むか氏公聞きし召めしれ、元來もとより古主こぬしの事なれば、兵庫ひょうこが心底こころ計てうがたら、ぎんみせ  
よとの嚴命げんめい、早打はやうちよてかけ付つけし、あんの如く貴殿きでんかくし置條おきじょうまぎれな  
し、昔のよしみよかくまふや、又首討くびつきて出でさるしや手てみじかの一口いつくちあき

なひ返答いかゞと問かくれば、兵庫ハ何のいらへもなく、傍よ有合弓矢  
追取きりくと引玄ぼり、一間を目當よ切て放せばあやまたすばつし  
と手をたへ血けふりと俱々障子を踏はづし、あけよ成て南瀬六郎ヤア比  
興玄ごくのひやうり者、あまき詞よ我を欺き飛道具よて玄とめんとハナ  
愚フツ、是式のへろく矢、百筋千すじ身よ立共、何程の事有ん、類を以て友  
とする、奸佞邪智の愚人原、一ゝ首をならべんと、無ニ無三よ切てかしる、  
心得たりと兵庫助、請つ流しつ上段下段尖き太刀筋アラシであたへ手負心ハシモコト  
やたけよはやれ共切込やいバをうけはづし、左のかた先切付られかつ  
ばと伏べ、わつと泣、若君ばひ取兵庫がさそく、むつくと起て六郎がやら  
玄と繩アガるを又一太刀、うんとのつけよそり返るを、見むきもやらず若君の  
首ちうよ打落し、檢使ケンシの前よ差置ペ竹澤タチザワよつと笑を含ハシム兼て知たる貴殿  
の心底疑ハダガふ筈ハサフなけれ共、徳壽丸か面脉マントウを見玄らざる此監物ケンモツ燒鳥ヤクニよへ

を念の爲誰見知し者や有罷出よといふ聲よ以前の馬士おづくはい  
出首をとつくと見改め、今日道よて見付し悴よ相違りござりませぬ、  
是よて万事相濟だり、尊氏公へ上なべ嘸に悦喜ほうびに追てはさた  
有んと立上れバ、ハ何分もは前宣敷近比に苦勞千万と互のあいさつ  
竹澤監物首取、持せ立歸る此家のさへぎ、若君の身の上と聞よりも有  
ふもあられず御臺所、湊が介抱漸と道よりも引かへし走つまづく氣に  
狂乱きやうらん、德壽とくじゅいかゞ、若君様六郎殿かずひやういづくと、うろくきよろく、兵  
庫ひょうこよべつたり、ト何じや、德壽丸にあいたいか逢たくば逢せてやらふと  
投出すハ首あき死骸しがい二人人ふたりはつと氣もてんどうスリヤモふ若わらわ殺された  
か、何とせん悉しやと死骸しがいよ取付泣玄こゑづむ、湊ハ身ぶるひはがみをな  
し、ト鬼共蛇共魔王共、名の付様のない悪人ごくじん、ト申御臺様所詮くわんいふても返  
らぬ事サお覺悟遊おきごばしませシテ、いふよや及ぶと用意の懷劍くわいせん両方より突

かゝる、ヤア及べぬちよこざいひろぐなど腕首つかんで突飛せば、又突か  
くる一念力、あしらひ兼てや兵庫之助、一間をさしてよげ入りたり、逃る  
逃逃そふかと、飛込襖の小影より寢言の長藏踊出、こんあ事も有ふかと  
跡も残つた甲斐有て、重くほうびの種此趣を注進と、云捨てかけ出す。  
後の障子のすき間々はつしと打たる手裏剣よ、きやつと斗よ息絶たり。  
何者の仕業ぞと、見やる一間よ聲高く、官軍の御大將、新田左兵衛佐義  
興公の御嫡男徳壽君御安躰よて渡らせ給ふ御安堵有と呼へつて傳出  
る兵庫之助、見るより二人の夢よ夢、徳壽丸の存命てか、若君様よてま  
しますかと、抱取たれいり豆よ花の笑顔のよこくくを見る目ぞくく  
嬉しさの何よ譬へん方もなし、女房はつと心付、若君様を助るとい思ひ  
がけなきお前の忠義、さぞかし深い方便でがなござんせふ、忘たが最前  
竹澤とやらみ首切て渡したれ、何人の子でござんした、夫こそい伴友

千代、此死骸が我子か。アはつと斗ふどうと伏前後、ふかく又泣出す。臺所も涙我身の上より引かへて、夫婦の心根思ひやる、いかよ主の爲ぢや迎、我子を殺して此若を助てくれる心さし。家來でなく、氏神共命の親共、今更よ禮の詞よつくされず、そして二つの間より友千代と取かへて此子を助た其譯が、其子細ハ六郎がナ上んと起直れべ、思ひがけなく又殉り殺されたと思ひしそなた、此六郎ハ兼てより命を捨ての謀義、忠義ハからぬ此兵庫、善惡二つよ引分れし一通の物語、扱も我君義興公、朝敵を亡せよと勅命を頭より戴必死と定めし出陣つゞく兵六万余騎、歎ハ名ヌおふ足利尊氏、隨ふ軍勢十萬余騎、兩陣互いどみ戦ふさしもよ廣き武藏野の草より出て草より入、やさしき詠よ引かへて月よ縁有弓張や射矢乱て篠すゝき枯野の草を踏越く、互よ恥有源氏と源氏、天下分めの晴軍、くんづ組れつ討つ討れつ、矢さけびの音鯨波修羅の街

よ異ならず、元來猛きに大將退つまくりつ數ヶ度の軍、さしもの尊氏敗  
軍にて鎌倉として引退く、虎も乘へきに勢ひ竹澤が勧みて跡を追か  
け討取んつゝけやくと乗出し給ふ、其勝軍が我夫の身の仇で有  
たかいの、いか程はやらせ給ふ共、無理よお留ゆなべ、そこよ如在  
の有べきか抜めなき兵庫殿、さまよお諫ゆされても、勝又乗たるに大  
將、承引ましまさす、いざむるを曲事迫に勘當、主従暇の印迎投付給  
ひし此扇跡みて見れば書置、朝庭より僕人多く君をまことに奉り、  
我謀を用ひざれば思ふ軍の圖をはづし、見苦しき負をせば、我のみなら  
ず先祖へたいし、新田の名字をけがさんより、いざぎよく討死せん、汝の  
跡よ生残り六郎と心を合せ、悴を守立くれよと有、細々との身筆す  
み、さまよお諫めゆせ共、聞入給へぬ日比の名氣質力及ばずすごく  
と羽なき鳥の心地みて、是非なく古郷へ立歸り、玄あんの間もなく竹澤

と江田判官が謀計<sup>ぼうけい</sup>みて、矢口のあひときへ給ふ、名有家の子郎等<sup>のしやう</sup>へとく討死し守りがたき新田の城落城<sup>じょうらくじやう</sup>、及びなば若君の行衛草を分つてさがすゝ必定<sup>ひづかやう</sup>、とやせんかくやと火急の思案<sup>しあん</sup>、昔唐士趙の國<sup>こく</sup>、程嬰杵臼<sup>ていひよ</sup>といふ二人の臣下主の孤<sup>みこ</sup>を助んと獻を計し、故事を思ひ出して相談極め、ぞ、若君と取かへて立退たるに此六郎<sup>ろくろう</sup>、我<sup>わ</sup>の敵へ裏返り密<sup>ひそか</sup>、若君御養育<sup>ごよういく</sup>、夫とハ志らずに臺様燒野<sup>たいようやけの</sup>の雉<sup>きつ</sup>、子夜の鶴<sup>つる</sup>、故<sup>ゆゑ</sup>迷ふ御旅<sup>ごりゆ</sup>づかれ、最前入せ給ひし時<sup>とき</sup>、わざとつれなくもてなせしも若や敵へもれんかと思ひ過し、若君の御身の爲と思し召、御用捨<sup>すて</sup>られ下さるべしと、始終<sup>しりゆう</sup>くはしき物語初<sup>はじ</sup>て明す本心のちりやくの程<sup>ほど</sup>ぞ類<sup>たぐ</sup>ひなき子細<sup>こざい</sup>を開て人このうたがひ晴<sup>はれ</sup>ても晴やらぬ涙<sup>なみだ</sup>の瀧<sup>たき</sup>をあらそへり、六郎の座をかため落たる刀取上て、腹<sup>はら</sup>えぐつとつき立る、何故<sup>なぜ</sup>の生害<sup>じやうがい</sup>とおどろき、すがればよつと笑ひ、ア心<sup>こころ</sup>よや嬉しやなア、助りがたき若君のお命助奉り、に臺

様へお渡し申せば、思ひ置事みぢんもなし、我命ながらへて、邪智深き  
鎌倉武士、兵庫殿を疑ひ、若君の臣身の大事、殊々數ヶ所の此手よて、助  
かるべきいへれなし、兼て落城の折から、友千代を殺させて敵よ油斷さ  
せんすと、約束よて立退しが、いかよ忠義といへば、迎、一人の我子をつき  
出して、我よ渡した兵庫殿の心根を、思ひ計て惜からぬ命をかばひ方よ  
よ身を忍び、そこや爰やのもらひちも、落人の身の心よ任せず、東西分ぬ  
ぬ稚子のうゆれば泣出すやんとや聲、飯の取湯や地黃煎で、だましすか  
して漸と、なつく程猶いちらしさ、我を親共めのと共、起ふしの上下よも、  
伯父よくとしたへ共、夜のねざめにいつ逆も乳をさぐつて泣出ししか  
ア〜といふ時の子を持ぬ身も骨身よこたへさぞかし親の心でり、  
夜の目も合す、玄たふらんどうぞ手渡しせん物と漸くなたの有り所を  
聞出し、忍び来る道退手よ出合、去年の深手よ不自由のからだ、又ぞや深

手を負おちながら、何とぞこなたよ一目見せ、其上うへのともかくもと此家へた  
どり付しかど、跡より玄くつたふ不敵ふてきの曲者くせき、さとられては一大事だいじと、夫れ故  
へみえみめぐらしやめぐらと、顔も見せざる殘念ざんねんと、語るを聞て女房めのわらわ、不便ふべんの者や  
いぢらしやいぢらと、久ひしう連添夫婦れんしよふぶの中、子のない事を苦くるよやんで、地藥ぢやくよ灸きゆよ  
湯治ゆうぢよと、様ようの心遣こころ遣ひ、夫めよかくして佛神ぶつじんよ立願りゅうがん祈願ごがんのかひ有あて、やう  
＼ 産うぶだ友千代丸ゆぢやまる庖瘡はうろうはしかも玄くつて取とべ、最早もはやらくじやと悦うれんで、袴着はかまき  
寺入てらいり讀物よみもの、何から何なにして斯かうしてと、案あんして居ゐたも皆みなむだ事こと、三さんツや四よんツ  
で死しるなら、うまぬがましで有あたかど、譯わけも涙なみだみだしきへ入はい斗とうみ泣なみだ  
しづひ、兵庫ひょうこのわざと聲こゑはげまし、どくよも死しべき悴すじが命めいけふ迄までもなが  
らへし、まだしもの仕合あわせせ、泣なみだな女房めのわらわ日比ひびよ似ひそぬ比興ひこう者しゃ、未練みれん玄くつごく  
もせまい、思おもひ切きり様ようも有あふけれど、お前まへ一人ひとりの了りょう簡かんで、わたしよわたくしいつゆ玄くつ

らさず殺して置て今又成て、比興あ泣な未練などいいかよ男のかうけ  
峯や逆我儘いふも事よりむごいわいのと打伏て、又さめぐと泣居  
たり、アヤ其恨うらみ去事ながら、お家の密事、天下の大事女童わらわ又打明る兵庫な  
らす、どひいふ物のいかよ計畧なれば逆朋友の六郎又手を負せ久しう  
りで逢ふた悴へりをもぎ取て、只一討たたか、玄らぬそあたの歎より、我子と知つて  
手よかける其時の心の内うちどの様よ有ふと思ふぞやいアヤ何六郎殿忠  
義といし器量きりょうといひ、末頼もしき若武者を、やみくと先立て、此兵庫ひょうこ  
生存命まがたまるを比興ひこうとよみして下さるなげ死死一旦だいつよして安し、跡あとよ残つ  
て若君を守立るこなたの大役おほ死死るよ増る千辛万苦其上一人の秘藏子  
を、アヤ三代相恩さんざいせんのお主の爲より、我子を殺すも身を捨るもちりほこり  
共思おもひね共、君を守立朝敵あさを亡ぼとして、天下の苦しみを、安んせんと思ひ  
し事も皆むだ事、時々合ねば名將めいしょうも仇あだよ過行光陰くわういんの、矢口の渡しでやみ

くと愚人原があさとき方便<sup>てうて</sup>と討れさせ給ひしれ、お家のふうんか南朝の衰ふべきとき成るせひよ及べぬ兵庫殿、六郎殿、無念くと手を取組忠臣義士の溜涙天<sup>なま</sup>通せば銀河堤<sup>あまのがはづみ</sup>も切て、流るらん、御臺所<sup>い</sup>むせかれり、我子を捨命<sup>すめ</sup>を捨るかしる家來の有ながら御運<sup>うん</sup>拙<sup>なま</sup>き我夫の御身の上のかなしやと過<sup>すぎ</sup>し事まで思ひ出しひたんの涙<sup>なみ</sup>よくれ給ふ六郎<sup>の</sup>目を見ひらき、後<sup>さがれ</sup>たり狼狽<sup>わらば</sup>たり、死する所<sup>い</sup>ちがふ共、我一念<sup>いっねん</sup>亡君<sup>ぼく</sup>の御跡したひ奉んさらばくとこゑの下、ふゑのくさりをかき切て、かつばと伏て息絶たり、妻<sup>わ</sup>泣<sup>な</sup>々我子の死骸<sup>がい</sup>かき抱き、となふる回向<sup>かう</sup>弘誓<sup>こうぜい</sup>の舟、生死の岸<sup>きし</sup>よほんのうのながれを渡る、三ヶ瀬川<sup>さんかせ</sup>かひいや先立おさな子<sup>こ</sup>、無常<sup>むじょう</sup>の風<sup>かぜ</sup>の櫻川<sup>さくら</sup>ちりよまじへる芥川<sup>あくた</sup>かしる浮世<sup>うきよ</sup>、隅田川、兵庫が心の荒川と見へしも智謀<sup>ちめう</sup>深川の、ふかき忠義のむねの中、みがき立たる玉川や淵<sup>ふち</sup>瀬<sup>せ</sup>なる飛鳥川<sup>あすか</sup>、臺所<sup>だい</sup>若君<sup>わかみ</sup>も思ひも寄す、藍染川、六郎が

魂魄こんぱくハ主君の跡を大井川、其源のよごりなき君み仕武士のやたけ、心こころぞ  
頼よりもしき

第四 道行比翼ひよくの袖そで

白玉か何ぞと人の問し時、露つゆとこたへん落人おちうしなの身よ添そよものゝ影かげばかり、  
夫さへ月の入ぬれば、二人ふたりのもの二人よてけふたち初し旅衣たびぎきるよ  
切れぬ縁の糸結いとむすびぶの、神の神かけて、一世も三世もまだ先の世もかれら  
ぬ中の、義峯ぎほうへ過し八幡の難義よりゑるべの方よやうくと、臺諸共忍  
ぶ身の忍ぶとすれど忍ばれず、まだ夜をこめて、鳥が鳴東かみとうの方へとたど  
り行、心の内ぞ、たよりなき、二人が中なかにつき出しの、其日よ呼で呉竹くれたけの、ふ  
しきな縁で、大津おおつぞとみな口の葉はようたれて、互たがよのぼる坂の下人目  
の關も龜山かめやまの玄あんやうの悪いわるい男のならひ、見せかけ計石藥師けいせきやくし、女良めらよく  
へない物と、見や玄あんやんしたへ間違まちがひのかふいふ事ことなるみ漏めろおまへ

も捨て岡崎と思へばわたしも藤川のもつれ合たる胸の内、打明ていや  
あか坂のなんぼ源氏の大將でもほいせいよ惚や、せぬわいな器量吉田  
の二かゝめ下さまの事玄らすかの、あらゐ上たる殿ふりよ深ふはまり  
し濱松の、そぶりを見付られまいと、誓紙を隠す袋井の契りを二世と、掛  
川や、金谷せぬどりいみ詞云ぬ鳴田の亂れ髪人目よ心沖津川、由井玄よ  
正しきほ身よて此有様ハ何事と思ひ廻す程、ばらの立のハ女のくせ、顔  
つくしと三島より運ぶ箱根の山こへていつかへときよ大磯と打涙  
くむ斗ニ、義岑公も諸共よ、玄ほるし心取直し大事をかゝへし我身なれ  
バ、鎌倉へ忍び込再び御矢を取かへすか、兄上の敵を討か、二ツよ一つ何  
れとも、助りがたき我命、そあたひ都へ立歸り亡跡とふてくれしと、跡  
ハ詞も涙も臺はつとせき上て、シヤ余りじや、とふよくな、今更いふでれ  
あけれ共勤の身よて勤をばはなれて逢ひ勧せぬ人よりい、又百そうば

い粹程結句、愚痴ゝ成根のない事ゝ腹も立、口舌いふたりつめつたりあ  
ちら向ても強よへくついた拍子ゝ下紐も、猶打解てひとつたりと抱し  
めたる睦言よ、かれいゝの明島、盡ぬ咄しよ、つく鐘の、ならふ事あら夜  
の明ぬ國ゝ生れて、いつ迄も抱れてねやの隙向て置別れても、うつり香  
の殘る思ひの、十寸鏡片時顔を合さねば生て居ぬ氣を知ながらむごい  
心と計みてすがり付てゝ中ゝよ離れたたなき花水の橋も漸打過て  
ひらよ／＼と平塚のゆかり求る藤澤よ宿のふ玄やれか聲／＼よ東男  
よ都の、女郎いきと情を一つよ寄て色で、丸めた懸の山傍で見るよへよ  
くらしい、そりや余り強過る、武藏野の月吉野の櫻景とふせいを一つよ  
寄て雪で、丸めた富士の山、噂聞さへうら山し、そりや余り、強過る諷ふ一  
ふし聞捨て、いそげ、道もとつかれど、古郷も近き程ヶ谷と思へべ、いと  
マーッ文字牛の角文字、直な文字、讀つくされぬ、かな川よ漸たどり「着給

ふ歸妙頂禮地藏尊玄やかのふぞくを臆念し、悪趣又出現玄給ひて衆生  
の苦患を導けり、鉦鼓の聲も幽なる生麥村の離れ家よ住バ都と墨染え、  
浮世を捨し道心者たがれまへの看經へ、殊勝又も又物淋し、大海へ塵  
をゑらいす不淨よも、日ハ照國の公や、持わましたるあぶれ者、ぶつたく  
りの万八がゆがみ蒼れた繩のれん、あたまで明てすつと這入、ヨレ道念夜看經  
もモフよなつ玄やれといへどいらへも一心不亂願以此功德平等施一切發  
菩提心往生安閑ちやん／＼と鉦打納め燈明しめし、万八様お出  
なされませ、イヤ坊様精が出るよ、玄たが先の知ぬ後生願ふより施餓鬼か  
ふんぞうでもじろかい、イヤ其かんぞうとやらせがきとやらをもじると  
い何の事でござりますぞ、イヤコレとぼけた顔せずとふらり大乗ぶちまけ  
て仕舞しやれテモ一向よ存じませぬ、うやぼなわろじやの、ふらりかこひ  
者相談よ寺方へ出入故よふ覺て居まする、おんぞうとハ饅頭の事だが、

宗言よりてしゆきん共又鉢巻共いふげなせがさとい鯖の事、又鯖を  
普賢といふ事ハ法花經とやら廿八とやら片假名とやらへちまとやら  
で、八宗を兼學せよや、といひ知れぬ事だと、且那寺の和尚様がお花の席で  
囁された、今時の出家がこんな事知らないでよい寺ハ取ぬぞや、次手よ覺  
て置つしやれ、人足との石もちの事、百姓との田作りの事、こいらりす  
んど覺やすい鯖を天がいといふてハ凡夫めらが悟る故み、今でハ袋足  
袋とやらかすだ、國姓爺とハ蛤淨國、とハ鮑の事、よふ稽古して置志やれ  
といへど相手よなら柴折くべ火を吹付て、かふあたまを丸めてハ肴  
が喰たい共思へねば、聞て置氣もござりませぬ、夫ハ悪い丁簡世帶  
佛法腹念佛、坊様、うんな片意地言ず共、こなたよ少頼事か有、何と聞て  
下さるべいか、アタあたまを丸めた役なれば、お前のふ爲よ成事ならとハ  
忝い別の事でもないが、高がかふだり、貴様を歴々の和尚よ仕立外よ

釣出す仕事じごとが有い。どふぞ頼まれて下され、やくへんなおつかない事ことハ敷ひら  
して下され、やくへんなおつかない事ことハ敷ひら  
お坊ぼう余り潔白けつぱくもやらかしてもおれががんばつて置おきためんかのまふい  
げんさいの事ことは、いやはさ昨日きのふの暮過器量はぐりやうのよい女めと若い男おとこが、爰あの内  
へはいつたをとつくりと見て置おきた、あれハ慥さうよ欠落者けつらくしゃこなた一人の仕  
事ごとみや行ゆまいおれと相談さんだんする氣きなら男おとこめをまいて仕舞仕舞玉たまをこつちへ  
引ひたくり、品川しながわへ賣うつて、やれば七兩誂しづかけ上の代物しろもの、玄くつたが、弓箭筋ゆきんなら  
金かなもやあらぬ、又親指ゆび肉にくがなけりやこれも商賣屋しょうばいやで嫌いやふ事こと、氣きを付つて  
置おきつ迄までやれ、癩てんかんを様ようみへあた豆まめ喰く玄くつやつい玄くつれる、身みの代しろものへこなたと  
山割さんざつなんどうまいかくと、憎おのれ一人ひとりが呑の込こでぬれ手てで粟あわのぶつたくり、  
世よ万八まんぱちといふ事こと、此男このおとこより始はじりける、道念どうねんハ無氣むきまめまめ、扱あそふ前まへと  
んだ事こと明あるけらや月夜つきよだと思おもふて、起おてぬながら寐言ねぎこといへ玄くつやる、一入いろいり

住の此庵室欠落者とやら女子とやらそんな事へ存ませぬ、そんならこなたへ知ないか、玄らあけりや是非がない、必後悔さつ玄やるなど、苦を放して玄ろくとそこら傍を見廻し立歸る、とんだ男が有物だと云つて立て、冬の日へ扱短い咄する間ともふ暮たと表を遙みながめやり、内へ這入てあたふたと門の戸玄めてせど口の稻荷の社の扉を開けば、内を出る義岑公臺も俱よしほれ顔、アくこちへと内へ伴ひたつた一枚嗜の掛川莞筵をさらりと敷遙下つて手をつかへ思へば盡ぬ御縁迫、昨日不思儀よお目よかしり、お供申へナながら世を忍ぶお身なれば、人の見る目を憚れ共、見る影もなき此庵室、忍バせナ所もなく、幸とシ稻荷様、此村の鎮守よて預りの此道念外からいらいてもござりませねバ、神へ見通し稻荷様へお詫申て暫しの隠家、喰お氣誥りに究屈、いかよ世の末なれば、迫、義貞様の御公達、義岑様共、有ふお身が此有様の何事

ぞと、こぼす涙よ義岑公、思ひがけなきそなたの世話、何角み付て心遣ひ  
過分至極との給へば、ほんよ不思儀のほ縁みて見ず忘らすのわたし迄、  
いかいお世話と、斗みて玄ぼるゝ姿海棠の雨をおびたる、風情へ、アリ其  
お禮よひ及びませぬ私ひお前様を能存じて居ますれど、末々の者なれ  
ば、ほ見知も遊ばしますまい、兄御様よ附添て武藏野のほ合戦、矢口の渡  
しのほ最期迄始終ほ供よ參りし者、其證據ほ目よかけんと、佛壇の下戸  
棚明て取出す一包、内よ何かの白木の箱、蓋を開いて有合す、物干竿を手  
べしかくきりく玄やんと押立れば、外よ類ひの中黒の紛ふ方なきお  
家の白旗壁よ立かけ飛玄より、ほ旗を所持する此坊主、元來ほ家のほ  
旗持久助とテ者よて身の軽けれど普代のほ家來、矢口でお果あされた  
時の其無念さ口惜さ、冥途のお供と川端へ幾度か立寄せられど、ほ先祖よ  
り傳へぬし大切の此ほ旗、敵の手へ渡すまじ、一先古郷へ持歸り若君

様へ差上で、其後死でくれふと殿様のひ最期を見捨てすぐく歸りま  
したりや。情なやほ家の亡はづび城の敵の乗取れしと聞た時はいなさ悔  
しさ。己のやれ敵の中へ踏込はさんで一人成共切殺し死で仕舞仕舞と思ひしが、  
弟のお前様の、お行衛行衛を尋出し、ほ旗のをお渡わたさんと此通姿をかへ上  
方へと思ふても、差當つて路金ろきんになし、お行衛行衛知しぬと聞からひ世間も少  
えづまつたら古こ郷きの方へほ出有あんど此所よ住居すみゆしてたくはつするも  
海道筋かいどう、待まよ待また甲斐かい有あて昨日きのよ不思儀ふしきよほ目めよかくくりまましたれ、私が存  
念おもが届とどたか、有難うれやと思へばく嬉うれしくて、夕部ゆふべもろくく夜よも寐ねられ  
ず、嬉うれし涙なみだで此正月、名主殿なむしから志おもしてくれた、布子ふすを涙なみだで絞しおりまましたとす  
しり上あがたる泣聲なみだこゑ、奇特ひがよも又哀れなり、義峯公ぎほうから手水てわ、ほ旗のを取て  
押戴おたふけ此旗のを見るよ付討つけうち死しなされし兄上おにじょうの最期さいごのほ無念むねん思おもひやる思おもへ  
ばく八幡はちまんよて、我わを残のこせ給たまひしも、生ながらへて家いえを繼つづと云いぬ斗とうの

御情、夫よ引かへ義峯の若氣の至りの不行跡、遊所を付込し竹澤が計略の元を投せば皆我故手こそふろさね兄上を殺せしも同じ事、其天罰みて此艱難に赦されて下さりませと歎けば臺へしやくり上、敵の方便みたらされて、とやかふ云たが種と成、兄御様の最期の悪人を引入し科人の此臺に簾の手前も恥かしい罰當りの我身をば蹴殺し給へと打ふして又さめくと泣居たる道念目をすり赤め、いふても泣ても返らぬ事、此上よもお前様のお家を發すが御孝行、私のかふいふ身の上、是より諸方を終行して、他力をかつて我君を一社の神よ祝んど思ひ立たる道念が志願の今よ傳へりて新田の社建立と、たへせぬ修行ぞ頼もしき、かかる折しも、万八が勧みて一度よ寄り来る百姓共、内よりハット驚く道念、義峰公の手ばかり御簾を取て懷中し又も隠るゝ稻荷の社表の方より無二無三戸を蹴破つて一時よどつと這入バ、何奴なれば狼藉と云せ

も果すコレお坊、此万八が相談より乗ぬからいお觸れ有た欠落者引くゝつて連て行、玉ハどつちへこかしおつたぬかせくと摺付そらはせぬと道念が、有合彎刀を追取て切てかしれば百姓共に免くと遂行を跡を慕ふて退て行万八の小戻りし社を目懸立寄て扉を明んとする所へ取て返す道念が彎刀振上し勢ひよコヤ叶ハぬと万八が一さんよ遂て行猶もやらじと追かけしが半途々立歸り、扉を開き二人を呼出し、今の奴等が歸らぬ内、此道を落給へと、勧み是非あく義峯公、臺も用意そこくみ、あてどもなみ落て行、道念跡を見送て社の内へそつと這入、扉を立る間もなく、追々歸る百姓共万八も一度よ落合、コレ皆の衆玉の有所見て置た、さつきよもいふ通り何でも角でも二ツよ割、半分の者が玄てやる、半分を物割だぞ、皆こい／＼と立かしり扉開いて引出せば、思ひ懸なく道念が、狐の面を引かぶりすつくと立たる有様よ、と驚百姓共、万八

も恂りはいもう、道念の作り聲、うぬらが根性ため直せと稻荷大明神の  
は神詔謹で承られと横飛こんく、狐の身ぶり百姓共の身の毛立只へと  
と計みて一度よ頭を地よりすり付尻もつ立てひれ伏り、玄すましたりと  
圖よ乘道念、わいらが心をためさんと假よ女の姿と化し此所へ來りし  
よ、強慾無慚の百姓めら、稻荷の神のに罰よて田畠殘らず踏わらし思ひ  
知さん思ひ知とはつたと、よらむ目も口も面で隔て見へ共ふんちがつ  
たる勢ひよ、恐れわなく百姓共<sup>ア</sup>やゝ夫の余りお胴欲様、私等の露芥程も  
曲<sup>ヨガ</sup>つた心<sup>ハ</sup>ござりませねど、此万八が頼故<sup>ヤシナ</sup>雇れて參つた斗<sup>ハ</sup>免なされ  
て下さりませと口を詫<sup>ハル</sup>れべ、そんあら此以後落人など搦捕とい云ぬか、  
何が扱く、夫なれば赦して取す、<sup>ハテ</sup>有難<sup>アリ</sup>がた<sup>カ</sup>ふござります此お禮<sup>ハ</sup>小豆<sup>アマ</sup>  
飯<sup>ハシ</sup>、<sup>ヤ</sup>まだ有く、此庵の道念がたくはつゝ出た時、通れと云すみたんと  
入るか、何が扱く、大抓<sup>ハカル</sup>よ入ませふ、夫なれば赦して取す、此萬八めの大

悪人、儕常陸の拔参りの、小娘をかどりかし神奈川へ飯盛めしと賣うなぐた事覺て  
ゐるか、南無三寶是はの委まつしうよふに存、其時ときハ博奕ばくち又負しやう事なしの  
出来心みごころ、微塵みじんも欲ほで致いたしませぬお敵おのきしなされて下さりませ、いまだ有あく  
伊勢原いせはらの百姓が、年貢とぎ納なめ出だる所を、おこりよかけて船ふねへ乗の、五十三  
兩りょう負おけさせた其言譯ことば、少共すこ有あまい、悲しや夫迄おとこまで存あか、そふ知しれて、  
おたまりやない、まだ有あく、隣となりの權助ごんすけが房州ぼうしゅうへ鮪網いわしじみよいた留主るすで、かし  
を儕ともがちよろまかし孕はらまかせた迄おとこまで知してゐる、ごレハ折おりきつい見通し、イモ一言ひとこともご  
ざりませぬ、イ大惡人だいごくじん、方八かたはめが村むらに居ゐる故ゆゑ此この村  
が繁昌はんじやうせぬ、村境むらのさかから追放おほはなするおれよ付つて引立ひだり來られ、ハ畏おそつたと百姓共  
方八かたはを壓おさすくめ、道念みちねんの神前かみまへの幣帛ひはく取とて先まへよ立た、狐面きつら張はるぶつたくりの  
方八かたは、欲ほの深い事ことハ糲町かうじょうの井戸いのどよ、アラウイアラウイヤリヤリヤリヤリヤリアラウイ、ねりま大根だいこんで太ふといの  
根ねと來あた、爪つめの長ながさが三十三間さんじゅうさん三尺三寸三分三厘さんりん三毛三拂さんぱつ、そこで稻荷

様の腹を立、王子の親玉真先がけ見めくり笠森、鳥森、杉の森から三  
崎、熊谷、善麥切九郎助福德愛敬稻荷、西の宮。此神々のに罰みて、そこら  
若い衆頼ます、此方八めを志めろや。い、引立てこそ「行末の、六  
郷」の近き世よりの渡みて其古へ都も東へ通ふ旅人の廻るも、遙弓と弦、  
矢口の渡と聞へたる其水上へ調布や、さらす垣根の朝露を、貫き留ぬ玉  
川の舟を浮る流より知ぬ心の底深き津人の頓兵衛が内どり思ひ機作、  
物好したる亭座敷渡世より似ぬ家作りへ馬脳の階瑠璃の門扉、龍宮城  
の乙姫か夫かあらぬか娘のお舟、鷺が孔雀のぼつどり者田舎よ惜き姿  
へ、擔桶、水を打かたげ、立歸る下人の六藏やお舟様、料理へ出来まし  
たか、且那殿へまだ晝寝、ほんよ、有ふ事か、今渡守の頓兵衛といふてり、  
おそらく日本國中、續者あき大長者、なれ共余り人使がひどいから、幾  
度置ても奉公人が三日とい居たまらぬ故、お娘御のお前が、竈本の世

話なさるで可愛らしい其の手が荒ふかと思へ悲しうてゝ、酸漿程  
な血の涙に家老か番頭かと恭れる此六藏、渡舟を漕隙より薪を割た  
り水汲だり、いまくしい事で有、爰あ内でも旦那殿と渡舟がなけり  
や樂亥やと小言よ、お舟の氣の毒顔、六藏人聞の悪いとし様の噂よし  
てたもれと制する折からとやくと亥つかりひ兵衛三十次、からの  
びん助三人連、親分の内よかと揚口から大あぐら、皆様よふお出なさん  
したと、お舟があいその烟盤、とし様にまだ晝寐、用が有なら起じませ  
ふといふ聲聞て一間を欠まじくら、今そこへ行て逢べいとゆるぎ出  
たる主の頓兵衛雪を欺く白髪よ朱をそいだる亥かみ面、強欲無道の  
眼ざし、八反掛の大廣袖紙子仕立の伊達羽織、とつかと座して、皆揃つ  
てよふ來た、亥て仕合ひとふだぞやいとふかふ所亥や何んせぬ、持て立  
た大至くござり、三人ながら此中の元手、すつぱり負て仕舞ました面目も

なき仕合し�ど、もぢかいすれべ、シヤさんドな目め合あた、ゑひい、負ふる時ときが  
なけりや勝事かつもない道理ぢ、少計すこ負ふた迎むか補ほ鍋なべ匠かが華鯨けいを請合うけあた様ようよ、騷事さわぐ  
たないわい今一勝負しやうぶやつて見みろ、シヤ娘むすめよシレ板厨いたくりの金かなを出だしてやれテ板  
厨いたくりを明あるめよも及ませぬ、ざつきよ品川しながわの兵五郎ひょうごろう様さまと青山あおやまの万九郎まんくろう様さまが  
見みへて、日外ひづき借かた金かなぢや逆さか持もて來きて、シヤござんさんす故ゆゑ、つい掛か硯すずりの引ひ出しへ  
そんなら出だしてやるべいいと、引ひ出し明あて開、幸爰こうあいよ六包ろくぱう有あ、一人前ひとりまへ二百  
兩にわで足たますべもちつと借かふかといふよ三人肝さんかんをつぶしつぶし、ナシト聞きたか、ナフ凡金ふんかな  
持も多おけれど、つがもないはした錢せんか何なんぞの様ようよ、掛硯かすりよも六百両ろくひゃくじょう、目出めしゆ  
度ばといふも程ていが有あ、昔むかからない物ものの錢金せんきん、折々氣きべらしよ芝居しばゐを見みても、近年かねんの淨きよ  
も出だよふか、今時いまない物ものの錢金せんきん、折々氣きべらしよ芝居しばゐを見みても、近年かねんの淨きよ  
るりでさへ、何なんぞといや金かなのない事こと余ありけちな此時じ節せつ、有所あるよいかふ澤なだら  
山さん、シヤどふすれば此様しづつよめつたよ金かなが出来できますするぞ、咄とつして聞きして下さ

れといへば頓兵衛烟管きせるこちく・イヤサ皆みなが了簡りやうけんが悪いから、出來る金も出來ないわい、塵じんが積のつて山さんといへど積のる内うち又吹ふきちる、二文四文亥いや塙さわや明あない出世しゆせい志しやうあら相場さあばか金山博奕かねやまぱくち勿論むろん是も近年かうんへこすいかうで能鴨よしかなもかしらぬ故ゆゑ此頓兵衛このとんびやうが思おもひ付つけ彼かれ鎌倉かまくらで借元かりそんの大將だいしよ足利尊氏あきよし様さまと謀反ぼうはん勝負かぶの義興殿ぎこうでんが、やみ雲くもの高たかつぱり、武藏野むさのの窩賭わばで大勝負だいせうぶ、元手もとての強い尊氏あきよし様さまも根ねこんざいぶち負ひて、ヨリヤ一番いちばん切替きりかわふと鎌倉かまくらへ、益ますがへ何か破きれかぶれの義興ぎこう、うぬが命めいを授長半じゅじょうはん、鎌倉かまくらへ仕掛つかはの博奕ぱくち、手てくおへない首尾しゆびよ成なたを、鼻はぱりの竹澤監物殿たけざわかんぶでんかすり取との江田判官殿えだばんくわんでんから、此親父おやぢへ人ひとをよこして、てらを玄くつてくれると思おもつて、どふぞ魂膽こんだん玄くつてくれると、色々とのお願ねがい後生こうじやうこそ願ねがひきけれ、人の爲ためよ成事せいじ、だじやが甘口あまくちでいいけまいと、水銀奴みずきんやつこからの思おもひ付つけで船ふなの底そこをくり抜ぬきて、六藏ろくざうめよさるを引ひせ、一番いちばんごつきりで義興ぎこうめを、川中かわなかでぐわんと云いせた其そのに

褒美<sup>ほみ</sup>よ此頓兵衛<sup>どん</sup>尊氏様の尻持<sup>しり</sup>で、大名<sup>だいめい</sup>成筈<sup>せいわく</sup>なれど、夫<sup>おとこ</sup>で<sup>ハ</sup>結句<sup>けく</sup>氣<sup>き</sup>が詰<sup>つ</sup>り、好<sup>すき</sup>の博奕<sup>はくぎ</sup>か打<sup>た</sup>れませぬ、大名<sup>だいめい</sup>けんどんよしよして、やつぱりたべ付た  
ふつかけの渡守<sup>としゆ</sup>がよござりまするど<sup>ナ</sup>上<sup>う</sup>たりや、そんなら何<sup>なん</sup>ぞ望<sup>まね</sup>と有<sup>あ</sup>  
そこでお金<sup>かね</sup>を乞<sup>う</sup>たしか<sup>ハ</sup>請<sup>う</sup>こ、そいつを元手<sup>もとて</sup>大勝負<sup>だいせいけい</sup>勝程<sup>かつ</sup>みける程<sup>ほど</sup>、持<sup>もつ</sup>  
丸長者<sup>まるなげ</sup>とい、おれが事<sup>こと</sup>、かふ普請<sup>ふしき</sup>をやらかしても、昔<sup>むかし</sup>を忘れない様<sup>よう</sup>と、アレ  
通り床<sup>とこ</sup>の間<sup>ま</sup>、櫓<sup>やぐら</sup>や、蓑<sup>みの</sup>を、鎧<sup>よろい</sup>物<sup>もの</sup>、出世<sup>しゆ</sup>の因縁<sup>いんえん</sup>かくの通りと語<sup>う</sup>るみぞ、三人<sup>さん</sup>ハ  
不審<sup>しんばれ</sup>睛<sup>はれ</sup>夫<sup>おとこ</sup>で聞<sup>き</sup>へた、そんならおいらも一思案<sup>いっしわん</sup>、何<sup>どう</sup>ぞあてすつぼう<sup>す</sup>よやつ  
て見<sup>み</sup>よかい、シヤガ<sup>シヤガ</sup>くり抜<sup>ぬき</sup>ふも船<sup>ふね</sup>ハあし、是<sup>そこ</sup>から坪皿<sup>ひらい</sup>をくり抜<sup>ぬき</sup>て、硝子<sup>さざなわ</sup>入<sup>い</sup>て  
やらかそふ<sup>そふ</sup>し<sup>し</sup>兵衛<sup>ひょうえ</sup>、やく夫<sup>おとこ</sup>もおらが望<sup>まね</sup>、爰<sup>はず</sup>なお娘<sup>むすめ</sup>の舟底<sup>ふねそこ</sup>がくり抜<sup>ぬき</sup>  
て進<sup>すす</sup>ぜたい<sup>タマ</sup>、お暇<sup>ひま</sup>其<sup>その</sup>内<sup>うち</sup>と皆<sup>みな</sup>打連立<sup>たれんて</sup>歸<sup>か</sup>る、道引<sup>みちびき</sup>違<sup>たが</sup>へて走<sup>は</sup>來<sup>る</sup>村<sup>むら</sup>の小底<sup>こそこ</sup>が  
ずつと這入<sup>はい</sup>、申頓兵衛様<sup>どん</sup>、お尋<sup>たず</sup>者<sup>もの</sup>の事<sup>こと</sup>み付<sup>つ</sup>て、竹澤様<sup>たけざわ</sup>から<sup>は</sup>用<sup>もち</sup>が有<sup>あ</sup>、庄屋殿<sup>しょう</sup>  
迄<sup>まで</sup>只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>一寸<sup>一寸</sup>、お尋<sup>たず</sup>者<sup>もの</sup>とい知<sup>し</sup>た事<sup>こと</sup>、新田方<sup>しんでん</sup>の落人<sup>おちん</sup>の、ほ詮義<sup>ほせんぎ</sup>であんべい、夫

なら行々や及べないどちら來ても此渡を渡々やあらぬ一筋道、兼て  
竹澤様としめし合、新田方の落人が、若此所へ來るが最期、相圖の烽火を  
上ると村上で法螺を吹べ、竹澤様から捕手（とぎて）が出る、若もおれが方で搦取  
か討取か、加勢々及べぬといふ知せより、亭座敷の上（うへ）、釣（つる）した太鼓（だいこ）を打  
べ、村上で取圍（とりまき）んだが皆ちる約束（きさく）、亥やう屋（いわや）どのが大な面（おほなおもて）で、どう參つた  
かふ參つた隣（となり）の姥様茶（うぶさまぢゃ）を參つたとむだ斗りいふで有、何か様子（ようす）の知ませ  
ぬが呼でこいとの云付、そんなら一寸（いん）行てやらふ、六藏（ろくざう）、若も落人（おとこ）臭い  
やつが見へたら、烽火と太鼓の手都合（てづあわせ）を忘れるなど、腰（こし）よ大たうぼつ込  
で小底（あるき）を連て出て行跡（ゆき）、六藏小聲（ろくざうこゑ）成（な）ゆ、お舟様（ふねさま）、お前（まへ）ひむごいと  
すり寄べ、とし様の留守（るす）成（な）、亥亥やらく（ははく）とてんがう斗（とう）、アイヤてんがう  
亥（はい）やござりませぬよ、とふからお前（まへ）惚（ほれ）て居て、何ば、口說（の）ても戸板（といた）よご  
ろ付豆（まわ）よ、其豆故（ゆゑ）身をつくし、根津音羽（ねづおとわ）いふ及べず、冰川（ひかわ）から補替（ほり）

樓、朝鮮長屋鮫が橋蘿蔔園迄はついたれど、笠森のふせんと、お前程なれどつこよもござりませぬれい。レヤどうぞ叶へて下さりませテレバ、モ耳の早いやつで、有、ヨリヤたまらぬと抱付、放せくとせり合所へ、表口から日傭の八助、六藏殿同、ちつとの内用が有、代、渡場頼といふて、われ又任せて貴様ハ、ヨリヤ玄な玄やあし、親玉へ知ると毛氈モウゼンをかぶる出入だ、ナアクござれと引立れバ、同少仕かけた用が有、もちつと待て下され、ヤイ、侍事ハ、ごんせぬ、貴様の顔で色事ト、唐なすも、古セウい、飛だ茶鎚ツバキが西瓜スイカと化だと打連舟場へ急行娘ハ、跡、獨言フ、けふの髪ハ、上村のふみよ様が、筋立てハくれあさつた大事の髪ハ、同を損ソコシふて、此笄ハシタの吹廻しの、紋迄なくして仕舞たとつぶやきく入よける、鶯鶯の番離れぬ二人連、義峰公ハ漸と道念が忠義故、生麥村を落のびて新田の方へと志し矢口の渡ハ、差かしり、同臺爰が兄義興殿のに最期有し矢口の渡し、此水底の恨しやと、川ハ向ひ

て合掌し、南無尊靈出離生死頓生菩提と回向の聲と諸共々、暫し涙ふく  
れ給ふ臺も、俱々涙聲テ、お歎の御尤、早ふ新田へお歸り有、ハ一門をかた  
らひて御矢の詮義兄様の歟をふ討遊べせと諫る詞ハシマフ、義峰公見れば  
渡よ人もなし道よて聞ひ此家が渡守の内トカヤや頼んで見んと門口ムロ  
歩寄ハシマフませふくハシマフとの給へば、奥ヲ走て娘の舟何の用と立出れば  
義峰公ハシマフしとやかよ、川の向ふへ参る者、舟の無心との給へば、顔つくづ  
と打守り、イエ舟ハシマフいくらも有けれど落人の詮義で日暮てり出しませ  
ぬ其上よお前の様な美しい殿ハシマフよ、借事ハシマフ猶成ませぬと、顔ハシマフ見され  
てうつとりと心の内ハシマフ焼ハシマフからの、胸ハシマフをこがせる薄烟ハシマフいとしと思ひ懸香  
のとふぞ留たき下心、義峰公ハシマフの氣のとく顔ハシマフ我ハシマフいそぎの道、くれよ及  
んでやど屋ハシマフあし差當ハシマフつてなんざなれば、何とぞ渡して下さりませイエ  
どふ有ても成ませぬ宿屋ハシマフがなくば私の内ハシマフ、どまりなさつたがよいわ

いな、ソヤとめて下されふか、留いで何といったしませふ。夫ハ近比添い連の  
女ガ持病のつかへ、さいわいのよい足やすめ臺こちへと呼入れバ。<sup>開</sup>  
あなたハおつれ様かへ、よくらしいとびんとする臺ハ志志やくし、た  
びづかれの私ら、お留あさつて下さるとハ添ふござんする。ア、お前もお  
連なら、おとまりなさんせ。サア見ぐるしけれど、おくのちんざしきが  
よい見はらし、あれでゆるりとお足休め、志からべ左様と義峯公、臺諸共  
打連て奥の一間入給ふ、跡打ながめ娘のお舟ほんみ美しいといふ  
か、可愛らしいといふか、とても女ふらまるとなら、あんあ殿御とそふ  
て見たい、夫のそとあの女中、兄弟なりやよいが、もし夫婦なら、わ志や  
何とせふどうせふと、おぼて娘の一筋入思ひみだるゝ糸すゝき、ほよあ  
られて見へよける、義峯公ハ一間を立ち出、ナク、お女中、つれの女が  
薬たべる、お湯の無心との給へば娘ハツ手をもちく、ヤたびのおかた

様へお前よちつと御無心がござんするごへしたりかふおせわよ成から  
ハ何あり共にゑんりよなふ、ア<sup>ア</sup>連の女中様ハ妹<sup>いもど</sup>でござんすか、お内儀  
様でござんすか、是ハ扱かれた事<sup>ハ</sup>御念が入、ア<sup>ア</sup>妹<sup>いもど</sup>にならよふござ  
んすが若<sup>ハ</sup>夫婦あらこつちよちつと濟<sup>すま</sup>ぬわけがござんする、ア<sup>ア</sup>成程あ  
の女の私の妹、久<sup>ハ</sup>の病氣<sup>びやうき</sup>ゆへほやうがてら淺草の、くへんおん様<sup>ハ</sup>、連  
てさんけい致しまする、嬉<sup>うれ</sup>しく、夫聞たらもふ何<sup>ハ</sup>もかも入ませぬ  
おまへどふぞ私が内<sup>ハ</sup>、十日も廿日も十年も百年も、たうりうなされて  
下さりませ、したが私らが様な田舎者<sup>ハ</sup>相手<sup>ハ</sup>成もおいやで有ふけれ  
ど、もふつんと、わしよ斗物<sup>コジナ</sup>云せ、こちらむいて下さんせと、右よ左  
と付け廻す、こはくのちりやぢしやくのはり、すいもぶすいも一様よま  
よふが上のまよひなり、義峰公<sup>ハ</sup>氣のとくば、思ひがけなきおやとの無  
心、いかいおせわよ成ますると入んど志給ふたもとをひかヘシ<sup>シヤ</sup>余りで

ござんする是程思ひつめた物を返事のないれお胴欲なんぼいなか生  
れでもほれたがいんぐれほれられたが、ふせうと思ふて下さんせ、日か  
げの木とも花さけペいわのはざまのたまり水すめべすむ世の思ひ出  
え、叶へてやらふとつい一口<sup>一回</sup>ひふてくれたが、よいわいあとすがり付た  
るそでたもど。さららで落る玉ざしのあられもないが懸ぢなり、義峯公  
もいなふねのいなみもあらず<sup>ふ</sup>、夫程迄思ふて下さるお志<sup>こころ</sup>さらく  
仇<sup>あだ</sup>より思ひませぬとじつと玄めたる手の内に、懸のぢやうまへ情のか  
なめたがひよいだき付草の、うつろひやすき色糸のぬれのいと口ほこ  
ろび口すい付引付玄め付てはなれがたなきふせいなり、時ふしぎや  
義峯公、娘もともよ色かなり、ハット身ぶるひたちまちよどつかと倒れいきた  
へたり、音ふおどろきかけ出る臺<sup>テラ</sup>、何事どうろたへながら、ひ玄やくの  
水を口うつし、かいほう玄ても呼いても其かひさらみせんかたも思

ひ付たる氣てんの臺、扱へ娘の色香よまよひ、心のけがれはたのとが  
めなるかと手を清め、義峯公のふところへ手をさし入てくだんのには  
た、さつとひらけべたちまちよ二人へゆめの、さめたるこしちおもての  
方より六藏がもどりかゝつて、うかれひ足、義峯公あたりを見廻し此家  
よどまりてうかゞひ見れば、かげうよしきるふ玄んのけつかう、様子とい  
ひ場所といひ、かたぐもつて心得すと、娘がれんぼを幸さぶかみといおどさ  
んと思ひしゆへ近ちかよれば今のしんだら、しさいぞ有ん此家の内うちと御はた  
を取てまきおさめ、うてな來れと引つれて奥の一間よ入給ふ、跡よしよ  
んぽりほいなげよ何と詞もなげ首し、だつきも玄らぬわた中よかぢな  
きふふねが物恩ひ、打玄うぶほれてぞ居たりける、おもてにひかへし六藏ろくざう  
木部屋もくやみかくせし一腰いちごぼつ込のはたを持からひまがひなき新田しんたのお  
ちうど相圖あひづのうろじを上ふかあがくうつ手を引うけ討うせてハ手がらよ

ならずぬけがけしからめ取てほうびのかねおれ一人でせしめてくれ  
んうまいくとうなづきくふくを目がけてかけ入を立ふさがつて  
娘のお舟こ六藏、そなたのおくのたび人を、何とせふと思やるぞ、ナ何と  
くわされた事、さつきよどくと見て置た、中くろのはた持からい新田の  
おちうど義峰よひみちがひれない、去年親方きよなんと相談こうだんして舟ふねそこをくりぬい  
て、義興よしおきを殺す時の命いのちがけの事てつだらせ御ほうびをもらふ時の親方  
一人であたしまり此六藏むくらのうちやつびい出物しゆぶつ成て今み此ざま其弟  
の義峯此度このたびおれがいけどつてほうび丸まるであたしまり、おれも出世  
をせよや、ならぬ、ぢやまなさるりや、お主おもしるとて用捨ようしるあいとめても留ら  
ぬそのいきほひ一間いつな立聞義峰公、娘むすめ一づいつづ戀こいのじやまはらひん物  
と玄あんくわんをさだめさだめ、むりよそなたをさしめせぬか何なんばいふても相手  
の武士士、若わかそんじまい物ものでもないわづかのほうびよ目がくれて、わし

がいふ事聞ぬからひ、是迄何のかのどいやつたり、みなうそかやといひ  
れてびつくりシリヤお前ほんの事かイヤノ奥の男めよ氣が有ゆへおれを留  
ふといふはかりど、そふうまくハ参るまい、ヤそなたの心を見た上と思  
ふてゐたゆへ、是迄ハ返事ヘンジもせなんだが、夫共ようたがやるなら、そあた  
のかつ手ハラみおたがよいと、びんとすねられ六藏シカウの悪寒カクはつねつあたま  
ゆゆげコイツヘエイワく夫ならおまへハ此六藏が性根を見た其上でハきまつ  
てくれるといふ腹ハラかザイ、そなたがおれと夫婦ハラハラなりや、ども様の爲ハラ子  
亥ハリやないか、親子の間ハラハラぬけがけして、一人の手がらハラハラするよやふよば  
ぬ、ども様ハラハラの庄屋殿ハラハラへ行てなればともと相談ハラハラいた上で、どう共ハラハラおたがよ  
からふと、口へ出ハラハラませ間ハラハラ合ハラハラをいふて水棹ハラハラや詞ハラハラのかぢハラハラわたりよ舟ハラハラ  
六藏シカウのせかけられてふハとのりコリ、近年ハラハラよないよい目が出ハラハラたひい、そ  
んならわしハラハラの庄屋ハラハラへいて、親方ハラハラを連てこふ、おくのやつらをハラハラがさぬ様

氣を付給へ女房とのびたはなげのどちらんぼう、より廻してぞ、出て行  
えすましたりと門の戸の、かけがねかけてとつかひと一間の内へ入る  
ける、かくて玄くも久かたのそらさへわたるふゆの夜の甘日ゐあか  
の月出て、ゑん寺のかねのかうくとつねよながるゝ川水も、いともの  
すごき門口の一むれえげるやぶの中、ぬつと出たる主の頓兵衛、玄ふん  
へよしと呼子のふゑ、へいのかげより下人の六藏、頓兵衛小聲トシヤ、<sup>トシヤ</sup>六藏  
娘めが目をさましじやまひろげべひちめんだう、物音のせぬ様よおれ  
一人で玄のび入ん手前ハマりおもてよ氣を付てもしそげ出べ討取よ、<sup>チツト</sup>合  
點とうなづきさしやき、六藏ロクザンの元の小かけよ、身を玄のぶ、頓兵衛ドンボウエイの門の  
戸を引と玄やくれど明ざアカハラれば、大だら引ぬきかべ切あけばいればふき  
込、川風よともし火きへて玄のやみ、勝手カタハおぼへし我内もよくよ心の  
くらまぎれ、忍べペいとゞ身もおもくゆかれきち／＼足音の耳へばい

れべ立留ビキり、一息イキはつと次の間へ又もふみ出す。あしの下シモびつゑやりく  
だけるたばこほん、どんくさいと心でいいかぎあがら、もそつとなげ  
ふすまよばつたりあいたしこなんあく、ゑのぶちんざしきはしごの上  
へ二ツあし三足ミツツクきやつも名メイふよふ義興ヨシヒコが一ぞくあれべこの物と心  
でうなづきそつとおり、下屋へ廻つてさぐりより、やみよもひかるだん  
びらをぬいて突ハサウこむ二かいのいた、上アマよいわつと玉タマぎる聲、さてやつた  
りと刃物引ぬき血ハムおしのごひ、二かいのはじでかけ上アマり、ゑやうじけば  
なし月かけよ夜着ヨガサ引まくり見てびつくりミツクリわりや娘ムネか、お舟ボウかとお  
どろきあがら、義峯ヨシマツと女めいづくへやつた、有アリやうよぬかせスルと、目  
をむき出しいかりの大聲、娘ムネかほをつれドと、うらめしそふス打な  
がめ、ずとし様シマツうきよよまれた人ヒトどよ、よくをゑらぬハナなけれ共ヒテ、お  
前のやうよこりかたまり佛共法共ボクヒツわきまへす、人の死ふハシマがたをれふハシマが、

我さへよければかまひぬと、身がつ手斗のがうよく非道ひだう有ふ事か源氏の大將、義興様をたばかつて。むさくところしたる、其天ばつが我子むくひよひよひとまりしたびのおかた、義みね様よひみねさまといつゆおらす、かれひらしい殿どのふりよはづかしながら心のまよひ、おそばへ寄べおそろしやほ旗ほはたのとがめ、義興様のほいかりよて、もんぜつせしも、そふどりおらぬ懸ゆきぢのやみ、さいせん六藏ろくざうを追おひ出だし、一間へ忍び様しのぶさまとなげきしよ、義峯様のふつしやるより、兄をころせし頓兵衛とんびやうが娘むすめへ此世でそふ事ならね共、親と一所でないといふ一つの功ごうを立たてるなら、みらいでそふふとおつしやつた、其一言がわしや嬉しい、此内うちよお出だ有あてて、お身の上うへも心元なく、るさいのわけを打明うちめいて月の出でぬ間まを幸さいよ船ふねよておどし参まいらせしと聞きより頓兵衛とんびやうだんだふみ、娘むすめがもどり引ひつかみみ、おのれおのれ／＼大たん千萬な、見みずおらぬ男めおとこめよほれくさつて、親の大事おほきを他人ほかひとよ

うち明手ひら又入た代物だいものをよふもく おどしかつた道志みちらずばちあたり。  
よつくりいやつとこぶしふり上丁じょうぢゃうくくく、手ふひの上のてうちやくよ、  
娘むすめいきもたへドまよまばち當り道志みちらずといふ事、か前も見事御存  
かづねトまふらちな玄くわんやうぶすき、あまつばへおそろしいわるだくみ  
が仕つかたらいで、たつた一人の娘のこい人、ころさふといふあく心からげ  
んざい我子わこを手てよかける、あんまり非道ひだらじやどふよくじや死る我身  
れいどりね共跡くわくのこつたか前の身の上、あんじ過すぎしがせらるしらると恨  
なげくばまやくよも立ぬよまいごと落人おちひとを取とみがして此親が立物か  
とつきのけはね退行のけんとす、娘むすめの袖そでよ玄くわんがみ付つるけんいふてもなげい  
ても聞入きいり給たまぬ無得心むぞくじん、かし様じやうがござるなら、仕様じやうもやうも有ふ物、何を  
いふても身一ついつぽうよ思ひつめたる義峯様、此世でそれぬあくゑんと聞  
べ聞はど猶戀ゆれんしく、お手てよかしつて死だなら親おやぢと一つでないといふ、云

譯立べみらいよて、いとし殿はみあひれふかと夫を頼みニツゝ一人の娘が先立べ一念ほつきも志給ひて、お心もなをらふかとはかない事を頼みよて、かくござひめて死まする。娘かへいと思すあらふ心をひるがへし、義峯様を助けてたゞ頼まするとくどき立わつと斗ふし志づみ、ち志ほゝあらそふ。血の涙ふびんと、いふも愚おろかなり、頓兵衛とんせしらわらひ、此年迄仕こんだ根性こゑじやう志やか如來じょらいが元服げんぱく志て、あやまゝ證文書ふといふても、いつかなくひるがへさぬ、あいづをさだめた義峯めを取みがして、竹澤様たけざわさまへやくそくの顔が立ぬと、娘を取て、つきとばし、二かいをかけおり川ばたよ仕かけしのろしよ火うちの早わざ天をこがせるほのほのひかり、かねて相圖あいづの村々より人をあつむるほらふき立さま物すごき其有様娘めのわらわくるしき身をあせり、村より大せいよて取まかれ給ひなべ、何とておいのち有べきと、天あめあこがれ地ぢみひれ伏志ふしおやうた

い涙のひまよりも、思ひ付たる一亥あん上あるたいこよきつと目を付。此<sup>シテ</sup>たいこを打ときりいけどりしと心得て、村<sup>シ</sup>のかこみをとくとさいぜん聞たが天のあたへ、爰ぞ殿<sup>シ</sup>へ心中の、女のみさほど一筋<sup>ナビ</sup>よ思ひ付たる心のまと、よろめくあしをふみ落めく、やう／＼べちをふり上で打んと落ても手<sup>ハ</sup>とゞかず、のび上りてりよろくく、又おきあをつてとび上り、とんと一聲かつぱとふす、ふとよおどろきかけ來る六藏、それ打せてよいものかと抱とゞむるをつきのけはねのけあらそふ内身がるゝ出立、頓兵衛が、つあぎしふね<sup>ミタ</sup>と飛のつて、櫓<sup>タカ</sup>を押立てこぎ出す上より娘が身をあせり、<sup>ニレ</sup>と聲かぎり呼<sup>ス</sup>とさけべとかな<sup>ハ</sup>ねば、又もやべちをふり上る、おつとまかせどうしろより、ばち引たくる六藏がわきざし引ぬき切付られ、らんかんよりまつさか様、川へざんぶり水けふり、上の娘がせんかたも、おちたるさやをふり上てめつたむ志やうよ打た

いこひきよあらそふ頓兵衛いろを押立てゑひさつま手きづよひる  
まぬ六藏が日比よなれしすいれんよ早瀬はやせのなみを事共せず、拔手を切  
て立およき娘むすめ死手しでのだんまつま夫をしたふゑうぢやく心蛇じゆ共成べ  
き日高の川、ひれふる山のかあしみも是よりいかで増まするべき跡あとへ間遠  
よなる太鼓だいこはるかよへだる「川向ふ、頓兵衛とんびやく」で限りあんなく舟を  
のり付てくがへ飛とがおりかけ出す、つゝみのかげよりかうゑやうよやうよ  
新田小太郎義岑よし岑是よ有、ひとつぶめ侍とよびかけられ、頓兵衛とんびやく」立留れば、  
すつゝと立て義峰公ぎほうこうげんざいの兄あにの歎かな見みのがすべきやつならねど、と  
ふで助けぬかのれがいのち、娘がせつなる心ざしよめで、ごんじの命助  
けしよ、おつかけ来るふてき者ものもふゆるされずと抜ばなせばば飛とがで火ほ  
入あつの虫むし名乘なまのりて出たひ百年めと渡り合て丁ころくはつし、何とかしけ  
ん頓兵衛とんびやくがつまづく所を義みね公よしみねこう付入て取て組くみふせ首くびをかくんとす

る所へ臺を引さげ六藏が、<sup>ア</sup>義峰親方ころさば此女一思ひと志め付る。  
おどろくたるみを見持返して頓兵衛が、ふむやらけるやらたくや  
ら、<sup>コリヤ</sup>六藏娘が敵の二人の奴原、なぶりごろしよしてくれんと、かいと、水  
棹さわのからさほ打、無念くと義峯公、臺だいへくるしきこへ限り、力一ぱいこ  
つめづが、いつそとゞめの一思ひ今がさいごくりんねんとふり上る間  
もあらふしづや、いづくら共志らはの矢二人がのどぶへぬかれて、其  
儘、息いきいたへはてたり、義峯臺だいへおき上り、<sup>ア</sup>前まへよおけがになかつたか、そ  
なたれ無事なか、去よても何者なにしわざなるぞと引抜く、<sup>ア</sup>是こそア家  
の重寶ちやうぼう水破兵破すいぱひやくの二にツの弓矢とおどろき給へば臺だいへ目早く、其矢そのの矢よ何  
かたんざくが、<sup>ア</sup>げふもと月あかり何よニにツの矢をうばしれて、新田  
の家名かめいのふとろへんことをうれへ、我が一念のつうりきよて敵の手よ  
りうばひかへし、其方へあたふる者もの、新田小太郎殿義興と、よみもおれ

らず義峰公、  
折の兄上義興公、お命ほろび給ひてもこんばくられい  
くと、家を思ひ、弟をあいれみ給ふ大恩、何を以てか報すべき、  
は矢手よ入からひ官軍くわんぐんをかりあつめ、朝敵てうてきをほろぼして兄上のうらみ  
をさんせん代よつたひる此御矢、家の重寶武うんのまもり、  
有がたし添しとおどり上つて慨び給ふ、末世の今よいたるまで新田のやしろ  
へ參詣し、守りのは矢てうだいのゐんゑんかくとぞ、志られける、時よむ  
かふの川岸がわよ、たいまつてうちんきらめきてさながらひるのとくなり  
きさてこそく、敵方のとりての人ぢゆ、押よするとおぼへたり、此ひま  
よおち延んのびど臺もろ共いつさんよやうくのがれ落給ふ、程もあらせ  
ず竹澤監物けんもの、あまたの家來けいらい、一どうよふねよこみ乘のり、  
ひつけおきし相圖あいづのたいこの聞へしれ、落人おちよをいけどりしと、また共く  
さたせぬり、志そんせしと覺おぼへたりおつかけて討うとめん、いそげやつと

下知すれば、ろをおし立てゑいさつさ。川のなかべより出す、不思儀や  
みかふ風ふこり川なみさか立かきくもり、そらよらいでんはたゞが  
みすさまじくも又醜ろし。あまたの家來を始めとして、水主かじ取色ち  
がひふてきの竹澤すこしもひるまず、ふなべたよつゝ立上りアひけう  
なり者共、此川みて去年のふゆ、義興めをころせしゆへ、うらみをなすと  
おぼへたり、シなよほどの事あらんと、こくうをよらんで立たる所よく  
う中より聲高アく、竹澤監物秀時アたしかふ聞、なんぢがてよほろびた  
る、新田左兵衛佐義興が、一ねん爰アあらはれて恨みをなさん、思ひ忘れ  
と呼べる聲の下よりも小山のごとくなみ立て、ふねをゆりすへゆりふ  
ろせば、くわうげんはきし竹澤も、五たいわなくたんはいろ、なをもふ  
き來るはやちかせ、ふねにくだけてとびられ、あまたの家來一時よそ  
このもくすと成るける、中よも強氣アの竹澤が、なみをくやつておよきゆ

く、上よりくろくもおほひかしり、かつちうをたひしたる義興公のほす  
がた、ばじやうゆししく出立て、御手をのべて竹澤がかうべをつかむと  
見へけるが二ツよさつとひきさいて、今こそうらみはれたりといふ聲  
ともよ船中みて、ぼろびうせたる十騎のこんばく、きみをしゆごして有  
／＼とくうちうよ顯るれば、らいもしづまりなみ風も治るに代の末迄  
も運をまもりのほ神とく、十騎の宮と諸共よあふがれ、給ふぞ有がたき

## 第五

新田左兵衛佐義興公怒の一念止時あく、鎌倉六波羅の館みて雷鳴數度  
よ及びければ、ほいかりをなだめんと矢口の村よ社をたて、けふ遷宮と  
聞傳へ参詣くんざゆをなしゆける、鳥井の方々人拂ひ、勅使のお入とさ  
さめけば、新田小太郎義峯公、裝束改め出給ふ、兵庫助信忠の徳壽丸をか  
しづきて禮義正しくひかへ居る程なく、勅使四條大納言隆資卿、もふけ

の席よつかせ給ひ、めづらしゝ義峯、それなるハ德壽丸よあ、扱も義興  
が靈魂、鎌倉六波羅のやかたみて種々の恨をなせしゆへ、尊氏義詮おそ  
れをなし、南北朝に和睦調ひ、天下太平と治り万民安堵の思ひをなすも、  
全く義興が神靈の徳、古今と類なき忠臣と名いかん殊々美しく、新田大  
明神と崇べし、又伴徳壽丸新田の城を給り父が本領安堵すべし、義峯ハ  
少將より任官し昇殿を許し給る、兵庫助が忠勤、南瀬六郎が節義獻聞、達  
し甚感じ思召る、義峯宜しく沙汰有べしとの綸命、猶も忠勤勵べしと聞  
て兩人有がた涙、義峯公謹で、有難き勅定此上ながら宜しき様、奏聞願  
ひ奉ると勅答有バ、兵庫助、尊氏公の執權、畠山道誓、清忠卿と心を合せ天  
下を奪ん工よて親しき一家の新田足利争亂及び手段、彼等が悪事顯  
れ兩家御和睦の印迎鎌倉を兩人よ繩をかけ引わたされていふ、夫と  
と有けれどベヘットいらへて道念が下知よ隨ふ守護の武士、二人のなハ付引

出す折こそ有思ひがけあき後の方聞をとつとぞ上よける。何事と見る所よ江田判官景連手の者引ぐし退取卷、開のれ過すなど下知すれば心得兵庫の若君を道念と抱せて當るを幸なぎちらせば、むらくゝばつと逃のちるを遁のさじやらじと追て行、其隙よ江田判官二人の繩付助んと立寄所よふしきやな、鳥井の笠木落かしり清忠景連はたけ山壓よ打れて一時よみぢんよ成て死でけり、よみゑぎなる神徳と勅使も感涙よし峰公兵庫助を始として有合人よ下部迄ハツト計よ三拜九拜實著き靈驗れいげんの聲よ應おこするごとく、水清ければ月やどる諸願成就長久の、君と神との道直よさかふる御代こそ目出度めでたけれ

明和七年寅正月十六日

神靈矢口渡 終

神靈矢口渡

明治廿五年二月十八日印刷  
明治廿五年二月十九日出版

讐  
發行刻兼

日本橋區通四丁目四番地  
内藤加我

日本橋區新和泉町壹番地

印刷者 瀧川三代太郎

發兌 金 櫻 堂

日本橋區通四丁目四番地